

「中央」と「地方」の関係性の再構築に向けた歴史学習の在り方
～東北地方に関する歴史教科書記述の分析を手がかりにして～

弘前大学大学院教育学研究科
教科教育専攻社会科教育専修
16GP206 安倍大祐

「中央」と「地方」の関係性の再構築に向けた歴史学習の在り方
～東北地方に関する歴史教科書記述の分析を手がかりにして～

論文構成

序章 はじめに

第1節 本研究の動機と目的

第2節 研究方法と構成

第1章 歴史学の中の東北

第1節 戦前～1960年代前半

第2節 1960年代後半～1970年代前半

第3節 1970年代後半～1980年代前半

第4節 1980年代後半～2000年代

第2章 教科書記述に見える東北

第1節 中学校社会科歴史分野の教科書記述

第2節 高等学校地理歴史科日本史Bの教科書記述

第3節 教科書分析に関する考察

第3章 「中央」と「地方」の関係性の再構築に向けた歴史学習の在り方

第1節 戦後歴史教育のあゆみ

第1項 「国体論的歴史観」からの脱却

第2項 地域からの視点

第3項 東アジアのなかの日本

第2節 東北を軸にした歴史学習の視点

第3節 東北を軸にした歴史学習の課題

終章 おわりに**参考文献****序章
はじめに****第1節 本研究の動機と目的**

本研究を行おうと思い立ったのは、2016年の冬である。2016年11月に弘前市で日本社会科教育学会が開催された。学会において『『地域再生』に向き合う社会科授業 ―東北の現実から考える―』と題し行われたシンポジウムで、パネリストの一人であった社会学者の山下祐介氏(首都大学東京)が「地方が東京へ過剰な依存をしている」と述べた¹。私は、この言葉が自分自身の故郷に対して感じていた疑問と関係があるのではないかと考えた。

はじめ

私の故郷である岩手県釜石市は、岩手県沿岸部にある港町である。2011年の東日本大震災以来、復興に向けて歩みを進めてきた。特に、2014年の大型ショッピングモールの誘致によって、市街地の様子は一変した。その一方、震災以前に市の中心であった商店街は閑散とし、立ち直りが困難な状況にある²。長年、釜石市で暮らす住民からは、「釜石市の人々は、自分たちで町づくりをしようとする気持ちが薄い」という声も聞こえた。外部の大型資本に頼らなければ、町を立て直すことが難しい釜石市の状況は知っていたが、この言葉から住民に依存意識があることに気づき、その意識がどこから来るものなのか疑問に感じていた。

この「自分たちで町づくりをしようとする気持ちが薄い」ということと「地方が東京に過剰な依存をしている」ということは関係があるのではないか。つまり、「中央」と「地方」の依存的・従属的な関係である。私が見た釜石の町の様子や住民の声は、「中央」である首都圏と「地方」である東北地方の関係性を反映したものであった。疑問に感じていた釜石市の人々の、依存意識は学問的に立証されていた。私は、この依存関係や依存意識の解消のために自分ができることはなにかと考え、本研究を行おうと考えた。私自身、東北地方の歴史について学んだのは、大学に入学してからだ。中学校や高等学校の授業では触れることが少ない東北地方の歴史を学んだ。そこには、教科書では想像できないほどスケールの大きな東北の姿があった。同時に、多くの疑問が浮かんできた。なぜ、京都や鎌倉で起きた出来事は知っていて、東北地方や岩手県、釜石市の歴史は知らなかったのだろうか。そもそも、なぜ大学に入学するまで、自分の生まれ育った土地の歴史について関心を持たなかったのか。自分が学んだ歴史とは何だったのだろうか。なぜ東北地方の歴史は、教科書に描かれることが少ないのだろうか。教科書に書かれている東北像と大学で学んできた東北像とは何が違うのだろうか。本論文ではこうした疑問を解決しながら執筆を進めていく。

山下氏は、この「依存関係」が「明治維新以来の国家の中央集権化によるもの」と述べている³。すなわち、近代国家として「日本国」が成立し、現在に至る歴史の中で形成されてきた依存・従属関係である。そこで、私は、近代以降、国民の創出の役割を担ってきた歴史教育の中に、依存的・従属的な関係の構築の要因を探ることはできないだろうかと考えた。その際、「中央」に対する「地方」の従属的な関係が最も顕著に表れている東北地方に着目した。

東北地方は、日本列島における中央や西南地域とは異なる歴史的な位置づけがなされてきた。例えば、戊辰戦争における東北諸藩の敗北である。周知の通り戊辰戦争が終結し、明治維新が成り、近代国家として「日本」が誕生した。東北諸藩の軍事的行動は、天皇に歯向かう行為であり、西南諸藩に対する立場であった。河西英通氏によれば、戊辰戦争での東北諸藩の敗北は、東北地方に対して「未開性」を付与したとしている⁴。つまり、東北地方は、中央や西南地域と対等ではなく「未開」で遅れた地域という他の地域と異なる位置づけがなされた。そういう意味で、戊辰戦争での東北諸藩の敗北はその後の東北地方にとって大きな意味を持つものであった。このように東北地方は他の地域とは異なる歴史的な位置づけがなされてきた。それは、戊辰戦争のみならず、他の時代でも同様であった。そういった東北地方の固有の歴史的な位置づけを踏まえながら、歴史教育の中でそれがどのように扱われ、従属関係の構築につながっているのかを考察していく。

本論文では、東北六県をまとめた「東北地方」を用いている。東北地方は、時代によって名称や範囲が異なるが、現在の東北地方の課題を題材にして考察していくため、現在の地理的概念で

ある「東北地方」を用いた。

特定の「地域」に焦点を当てた歴史教育研究や実践は現在まで多く行われている。戦後、歴史学では「皇国史観」や「天皇中心史観」からの脱却が試みられた。そこで焦点があてられたのは地域や民衆の視点であった。戦後、こういった視点から歴史を構築しようと「地方史」研究に注目が集まった。しかしその後、1960年代半ばから、「地方史」が中央史の枠組みを脱却できていないという指摘がなされる⁵。中央史は、支配者層から見た歴史、つまり「中央中心史観」や「一国史観」によって構成されている。そこには地域の主体性の欠落があった。そうした中で地方史の問題点が指摘され始めた1960年代後半から「地域史」が注目を集めるようになる⁶。地域史は「一国史」的な歴史像の概念に対する立場であって「中央史」に対する「地方史」の従属感を脱却する手立てとして認識された⁷。歴史教育でも「中央中心史」や「一国史」を脱却しようとする試みが見られ始める。

「地域」に焦点を当てた歴史教育は、早くは1969年の第21回の歴史教育者協議会報告会で見られる。この報告会に端を発した「地域に根ざす歴史教育」はその後さらに活発に議論されるようになる⁸。その後各地で、地域や題材にした歴史教育実践が行われる。1997年の第49回の歴史教育者協議会報告会(宮城大会)⁹での「地域に根ざす一本の道」や2004年の第56回の歴史教育者協議会報告会(山形大会)¹⁰での「足もとから世界へ」というテーマでの地域実践報告があるように地域の独自性に焦点を当てた教育研究や実践が試みられてきた。2004年の寺田肇氏の「農民の生活が見えてくる地域の掘り起こしを—『民次郎一揆』を学年劇に—」のように地域の出来事を取り上げた教育実践¹¹や2005年の高橋祐子氏の「日韓の絆をつくった人権弁護士『布施辰治』」のような地域の人物を取り上げた実践¹²などがある。また、高橋祐子氏の実践は、日本と韓国とのかわりをテーマに取り上げたものであり、東アジア地域の中で日本の地域という視点が盛り込まれている点で注目すべきである。地域を題材にした教育実践の中には、東北地方を題材にした実践もある。例えば、一戸富士雄氏の「東北の地域史をとおして日本全史を再構築する視点」は、東北地方の歴史を題材に「日本全史の部分史として従属的に構成されていた」歴史認識の問い直しを試みた実践である¹³。しかし、これらは、地域に焦点を当て、「中央中心史」や「一国史」を脱却する手立てとして考案された実践である。地域から日本史像を構築していく視点であって、「中央」に対する「地方」の従属関係という現状の課題を踏まえた実践には至っていない。先にも述べた東北地方の固有の歴史的立場づけを踏まえ、関係性を再構築する手段として考案された実践は、私の見る限り見られなかった。私は東北地方が抱える従属関係という現状の課題点に焦点を当て、東北地方が置かれてきた歴史的立場づけを考えながら、従属的な関係性が構築されていく過程を歴史教育の側面から解き明かしたいと考える。また「中央」と「地方」の関係性の再構築に向けた歴史学習の在り方について提案してみたい。

第2節 研究方法と構成

研究方法として以下の構成をとる。

第1章では、近年の歴史学の動向を見るため、東北に関する歴史学の整理を行う。

第2章では、第1章での研究史の整理をもとに東北に関する歴史教科書の記述を分析していく。歴史学の進展と照らし合わせながら、東北に関する教科書の記述内容が具体的にどのように変化

しているのか比較分析を行う。歴史教科書は、中学校と高等学校で多くの子どもが使用する。そのため、教科書が子どもの歴史認識形成に大きな影響を与えると考える。特に、中学校ではすべての子どもが歴史教科書を使用、歴史教育として日本史を学ぶ。そこで、本論文では、中学校の歴史教育を主軸に考察を行う。本論文では、分析の対象として高等学校の日本史 B で扱う、教科書も対象としている。高等学校の教科書の記述は、中学校の教科書と比べてより詳細になっている。中学校と高等学校の教科書記述を通貫して分析することで、現在の歴史教育の動向をより詳しく分析することが出来ると考えた。その中で、中学校の段階で記述されている東北の歴史像が、高等学校の歴史教科書ではどのように変化しているのかを見ていく。

分析対象として教科書を使用するが、その際、以下の 4 つの時期の学習指導要領を基準にし、教科書を選定する。学習指導要領については以下の①から④の時期のものを使用する。

基準となる学習指導要領

- ①1977・1978(昭和 52・53)年度版
- ②1989(平成元)年度版
- ③1998・1999(平成 10・11)年度版
- ④2008 年・2009(平成 20・21)年度版

現在の教育課程は、④の 2008 年・2009(平成 20・21)年度版に沿って編成されている。

各指導要領の施行中に使用されていた教科書は、資料の「使用教科書対応表」にまとめている。

対象となる教科書会社

中学校の教科書については、2015 年の時点で占有率 51.0%と首位の『新しい社会歴史』（東京書籍）を使用する¹⁴。高等学校については、2017 年の時点で占有率 49.4%と首位(現行版との合計 63.6%)の『詳説日本史』（山川出版社）を使用する¹⁵。

第 3 章では、歴史学習の在り方を提案する際の手がかりとして、現在までの歴史教育の動向について述べる。さらに、その歴史教育の動向を踏まえたうえで東北に軸を置いた歴史教育あるいは歴史学習の在り方を述べる。

以上をまとめると次のような構成になる。

本論文は本章を含めて、5 章で構成されている。各章の概要は以下の通りである。

序章では、本研究の動機と目的、研究方法について述べている。

第 1 章では、教科書記述の根拠となる東北史研究についての研究史整理を行っている。

第 2 章では、教科書分析に見られる東北の歴史について具体的な考察を述べている。

第 3 章では、現状の歴史教育で試みられている研究や実践について整理している。さらに、教科書の分析と歴史教育の試みを踏まえた上で、東北史についての歴史学習の視点と課題について述べている。

終章では、本研究の課題との展望を述べている。

¹ 山下祐介(2016)「地方創生言説のなかの地域学」(日本社会科教育学会シンポジウム発表資料)

² 古川美穂(2015)『東北ショック・ドクトリン』pp. 137-176, 岩波書店

³ 上記 1 に同じ

⁴ 河西英通(2001)『東北一つくられた異境一』(中公新書 1584), pp. 10-11, 中央公論新社

⁵ 西垣晴次(1982)「地域の歴史像」『講座・歴史教育—歴史教育の理論—』(講座・歴史教育 3), 加

藤章・佐藤照雄・波多野和夫編, pp. 181－195, 弘文堂

⁶ 上記 5 に同じ, pp. 189－190

⁷ 入間田宣夫(2000)「全国史の再解釈と地域主義」『宮城歴史科学研究』49, p. 10, 宮城歴史科学研究会

⁸ 歴史教育者協議会(1979)『地域に根ざす歴史教育の創造-歴教協 30 年の成果と課題-』pp. 172－173, 明治図書出版

⁹ 歴史教育者協議会(1997)「特集歴教協第 49 回宮城大会報告集」『歴史地理教育』569, 歴史教育者協議会

¹⁰ 歴史教育者協議会(2004)「特集歴教協第 56 回山形大会報告集」『歴史地理教育』677, 歴史教育者協議会

¹¹ 寺田肇(2004)「農民の生活が見えてくる地域の掘り起こしを—『民次郎一揆』を学年劇に—」『歴史地理教育』678, pp. 44－47, 歴史教育者協議会

¹² 高橋祐子(2005)「日韓の絆をつくった人権弁護士『布施辰治』」『歴史地理教育』691, pp. 58－63, 歴史教育者協議会

¹³ 一戸富士雄(1977)「東北の地域史をとおして日本全史を再構築する視点」『歴史地理教育実践選集』33, pp. 87－93, 新興出版社

¹⁴ 産経新聞「28 年度中学教科書」産経ニュース, 2015 年 10 月 31 日

<http://www.sankei.com/life/news/151031/lif1510310017-n1.html>(2018 年 1 月 29 日閲覧)

¹⁵ 内外新聞「17 年度高校教科書採択状況—文科省まとめ (上)」, 2017 年 1 月 20 日

https://www.jiji.com/service/senmon/educate/backnumber_doc/e170120.html(2018 年 1 月 29 日閲覧)

第1章 歴史学の中の東北

本章では、教科書の記述内容の根拠となる歴史学の進展を見ていく。現在、どのような東北史像が描かれているのか、また、それがどのような経緯をたどって現在に至るのかを把握し、教科書分析の際の手がかりとする。東北史についての研究は、多岐にわたるが、榎森進氏¹や入間田宣夫氏²、柳原敏昭氏³の研究史整理を参考にし、およそ10年間で研究の潮流や傾向が変化していることが分かった。そこで、筆者自ら、第1節から第4節までの時期区分を設け、東北地方の歴史に関する研究史の整理をおこなった。

第1節 戦前～1960年代前半

戦前から1960年代前半までの時期には、東北を未開の地、後進地域という認識がなされていた。さらに東北を中央とのかかわりにおいてのみ捉える歴史研究が主流であった。

榎森進氏によると、1950年代までの東北史は、東北を「未開・辺境の地」や「中央政府の開拓の対象となった地」という認識で捉えられていた。この時期までの東北地方の理解には、それまでの歴史学研究の「東北＝後進地域」という捉え方が前提としてあった⁴。榎森氏は、50年代までの東北史研究の動向を探るうえで、1955年に発刊された『東北史の新研究』⁵を挙げている。この時期における東北史の代表的研究が掲載されており、この時期までの東北史の到達点を読み取ることができる。一例をあげると、古代史研究においては、伊東信雄氏が「古代の東北地方が蝦夷のすんだ未開野蛮の地とすることは従来の歴史学の常識といってもよい」⁶としている点で東北の未開性が定説であったことが理解できる。さらに遠藤進之助氏は、戊辰戦争についての記述に触れ、「主役を演じた西南雄藩にのみ詳しく、これと対立した幕府＝東北諸藩についてはあまりに無関心」⁷であるとして、東北地方の歴史研究の未発達さを指摘している。

また榎森氏は、歴史の展開を「中央とのかかわり方」を軸にとらえている点で特徴的であるとしている。高橋富雄氏が、古代における中央政府の「植民地経営」⁸について述べるなど、東北が西日本、つまり中央との対となっていたことを述べている。中央とのかかわりを軸にとらえたために、東北からの視点で歴史を構築することが困難であったと考えられる。

榎森氏は、1967年に発刊された『東北の歴史』⁹についても言及しており、同書が、「東北の歴史を統一的に記述した最初の通史」であると評価したうえで、やはり「中央とのかかわりでのみ」歴史を構築するにとどまっており「東北の独自の論理」は形成されていないとしている。¹⁰

第2節 1960年代後半から～1970年代前半

1960年代後半から1970年代前半は、一部研究者から東北から見た歴史像の構築が目指された時期である。このころから、東北の独自の論理を形成しようとする研究が見られ始まる。

榎森氏は、この時期の東北史研究を「東北という地域の新たな視点からの歴史像の構築」と、それをふまえた上での「日本史像の再構成」の必要性が指摘され始めた時期であると述べている¹¹。そのことを把握できるものとして榎森氏は、1972年に東北史学会主催のシンポジウム「東北史の諸問題」をあげ、「日本史像の再構成」の試みがあったことを指摘している。シンポジウムの中で、工藤雅樹氏は、中央との関係性から東北の歴史を論じれば「中央勢力の進出と支配をたたえる東北像は拭い去ることができない」と指摘しており、「東北という地域の新たな視点からの歴史像」の究明が求められている¹²。

またこの時期の東北史研究は、「北方(北奥羽諸藩, 松前, 蝦夷地)」とのかかわりの視点が欠落しているという指摘もされており, 注目すべき点である¹³。

第3節 1970年代後半～1980年代前半

1970年代後半から1980年代前半の時期には, それ以前の東北史研究が目指してきた東北独自の論理を打ち出した研究が多く見られるようになる。また一部で北方世界を視野に入れた研究がなされ始める。

大石直正氏の研究¹⁴など一部で, 中央からの東北史像を克服、東北の独自の論理を軸に新たな東北史像を描こうとする試みがみられる。¹⁵

長谷川成一氏の研究¹⁶など一部で, 「北方世界」も視野に入れた研究が行われ始めた。「東北＝辺境＝行き止まり」ではなく, 「北海道」とのかかわりが認識され始めている。

第4節 1980年代後半～2000年代

1980年代後半から2000年代の時期では, 北方世界や東アジア世界にまで視野を広げた研究が行われ始める。

1986年の「函館シンポジウム」や1988年の「弘前シンポジウム」が開催され「北から日本史」と呼ばれる研究潮流が見られる。北方世界や東アジア世界とのかかわりの中で東北を捉え直すとする動きが見られる。つまり「東北地方」という国家の枠組みを一度相対化し, 東北地域独自の歴史を構築しようとする研究動向が主流となっている。これは, 前節の時期とは異なり, 東北内部の歴史として完結させるのではなく, 東北という地域を様々な地域とのかかわりの中で相対化しようとする視点である。

この時期には, 国家を前提とした歴史, つまり「一国史」を見直そうとする歴史学研究が盛んに行われているようである。岩波講座日本史には, 1993年から1996年に発刊された第4次『岩波講座の本歴史』や2013年から2015年に発刊された第5次『岩波講座日本歴史』にそれぞれ「地域史」や「地域論」といったテーマで書かれた論文が見える。それまでの同書には見られなかった「一国史」の枠組みを越えた「地域」の視点が加えられている点は注目すべきであろう。日本の歴史を相対化し, 「地域の視点」が強く押し出されている。かつて日本の周縁部と位置付けられた東北の歴史は, 中央の歴史に従属的であった。東北史研究において「一国史」からの脱却が盛んに行われているのはこうした背景があったのである。

青森県三内丸山遺跡の本格的な発掘調査がなされたのもこの時期である。1992年に調査が開始されて以来, 現在に至るまでの三内丸山遺跡では多くの発見がなされている。(三内丸山遺跡については第2章で詳しく述べる)。これらの発見は, それまで一般化され, 常識とされてきた従来の縄文像を覆すものであった。一般化できないような多くの発見とこれまで一般化されてきた歴史, つまり国家を前提とした「一国史」的な歴史像との矛盾が浮き彫りになった。今後も三内丸山遺跡の存在は, 「一国史」の在り方, 現在の東北史の在り方を考える上で重要な問題提起となる。

第4節 東北史研究の考察

以上, 戦後の東北史研究の整理を行った。

戦前から1960年代前半の東北史は, 東北地域を未開の地や後進地域とする前提があつて, 中央の

論理の中に組み込まれた東北史研究が主流となっていた。

1960年代後半から1970年代前半では、東北という地域の歴史を見直し、新しく日本像を構築しようとする動きが見られた時期であった。

1970年代後半から1980年代前半では東北の独自の論理が打ち出された研究が多く見られ、一部では、北方世界にまで視野を広げた研究が見られるようになる。

1980年代後半から2000年代には北方世界のみならず東アジアとの関わりで東北の歴史の構築を試みるような研究が見られるようになる。

「一国史」からの脱却の研究は、前近代において顕著である。筆者の見た限りでは、近代以降の研究にはこういった特徴は見られなかった。周知の通り、国民国家としての「日本国」の領域・国境が明確化されたのは近代以降である。前近代は、近代以降とは異なり、「日本国」の枠組みが明確化されておらず、日本列島内の各地域が「国境を超えさまざまな広がりを持つ地域」¹⁷で構成されていた。「一国史」から脱却を目指し、様々な地域を相対化してとらえる際、やはり前近代の歴史に焦点が集まるのは当然のことである。

以上みてきたように近年の東北に関する歴史学研究は、従来の「日本国」という国家を前提にした歴史像、つまり「一国史」を脱却する動きが見られる。北方世界や東アジア世界にまで視野を広げて、国家や国境を相対化して歴史を構築する試みが見られる。特に、東北や北海道といった「日本国」の周縁部として位置づけられていた地域の研究については、その動きが盛んなようである。東北地方の歴史に関しては、2015年に発刊された『東北の古代史』¹⁸から2016年に発刊された『東北の中世史』¹⁹までのシリーズ本が出版されている。これらは、東北地方に関する歴史の通史的な本である。このことから、近年研究の成果が書き換わっており、改めて東北の歴史に注目が集まっていることが分かる。この背景には、以上のような東北史研究の成果があると思われる。

¹ 榎森進(1988)「研究史の整理と課題」『北からの日本史』北海道・東北史研究会編、三省堂

² 入間田宣夫(2000)「全国史の再解釈と地域主義」『宮城歴史科学研究』49、宮城歴史科学研究会

³ 柳原敏昭(2002)『『北からの日本史』と『南からの日本史』と』『北の環日本世界書きかえられる津軽安藤氏』村井章介・斉藤利男・小口雅史編、pp. 206-207、山川出版社

⁴ 上記1に同じ、pp. 18-21

⁵ 古田良一博士還暦記念会編『東北史の新研究』文理図書出版

⁶ 伊東信雄(1955)「考古学上から見た東北古代史文化」『東北史の新研究』古田良一博士還暦記念会編、p. 1、文理図書出版社

⁷ 遠藤進之助(1955)「戊辰東北戦争の分析—維新東北政治史の一断章として—」『東北史の新研究』古田良一博士還暦記念会編、p. 284、文理図書出版社

⁸ 高橋富雄(1955)「東北古代の開拓」『東北史の新研究』古田良一博士還暦記念会編、p. 31、文理図書出版社

⁹ 豊田武編(1967)『東北の歴史 上巻<原始、古代、中世編>』吉川弘文館、

¹⁰ 上記1に同じ、pp. 27-28

¹¹ 上記1に同じ、p. 28

¹² 工藤雅樹(1972)「東北古代史の再検討」『歴史』42、p. 27、東北史学会

¹³ 上記1に同じ、p. 32

¹⁴ 小林清治・大石直正編(1978)『中世奥羽の世界』東京大学出版会

¹⁵ 上記3に同じ、pp. 206-207

¹⁶ 長谷川成一(1979)「北方辺境藩研究序説」『弘前大学国史研究』68・69 合併号、弘前大学国史研究会

-
- ¹⁷ 阿部保志(2000)「地理歴史科における地域史の教材化―北海道史における地域と国家・乙部品川牧場を事例に―」『社会科教育研究』84, p. 2, 日本社会科教育学会
- ¹⁸ 阿子島香(2015)「北の原始時代」『東北の古代史』(東北の古代史 1), 吉川弘文館
- ¹⁹ 高橋充(2016)「東北近世の胎動」『東北の中世史』(東北の中世史 5), 吉川弘文館

第2章 教科書記述に見られる東北

本章では、前章での歴史学の研究史整理をもとに具体的な教科書分析を行う。教科書中に見られる東北地方に関する記述は主に以下の4つである。

- (1) 律令国家形成期の蝦夷支配について
- (2) 武士の成長について
- (3) 戊辰戦争について
- (4) 昭和恐慌による東北大凶作について

これらは、分析に使用する中学校、高等学校の教科書すべてに共通して取扱われている。

高校の教科書の一部で東北に関する記述がある。それは縄文時代の青森県三内丸山遺跡についてである。時系列では、(1)から(4)の出来事より前の時代だが、三内丸山遺跡を取り扱っている教科書が、1998・1999(平成10・11)年度版による教科書と現行の教科書に限られているため「(5)縄文人の生活」として分析の後半部分に記載した。

使用する教科書については、前述したように中学校では東京書籍の『新しい社会』、高等学校では山川出版社の『詳説日本史』とする。

分析する際に使用する教科書は、以下の表の通りである。

中学校

	タイトル	著者名	使用期間	発行年	学習指導要領
A	『新しい社会 歴史』	鵜飼信成, ほか33名	1981 ～1983	1981年	1977・1978 (昭和52・53)年度版
B	『新しい社会 歴史』	川田侃, 尾藤正英, 田邊裕, ほか33名	1993 ～1996	1993年	1989 (平成元)年度版
C	『新編 新しい社会歴史』	五味文彦, 斎藤功, 高橋進, ほか45名	2006 ～2011	2010年	1998・1999 (平成10・11)年度版
D	『新編 新しい社会歴史』	坂上康俊, 戸波江二, 矢ヶ崎典隆, ほか49名	2016～ (現行)	2016年	2008年・2009 (平成20・21)年度版

(筆者作成)

高等学校

	タイトル	著者名	使用期間	発行年	学習指導要領
a	『新 詳説日本史』	井上光貞, 笠原一男, 児玉幸多	1988 ～1991	1988 年	1977・1978 (昭和 52・53) 年 度版
b	『詳説日本史 改訂版』	石井進, 笠原一男, 児玉幸多, 笹山晴生	1998 ～2005	1998 年	1989 (平成元) 年度版
c	『詳説日本史改訂版』	石井進, 五味文彦, 笹山晴生, 高埜利彦	2007 ～2016	2007 年	1998・1999 (平成 10・11) 年 度版
d	『詳説日本史 改訂版』	笹山晴生, 佐藤信, 五味文彦, 高埜利彦, ほか 12 名	2017～ (現行)	2017 年	2008 年・2009 (平成 20・21) 年 度版

(筆者作成)

第 1 節 中学校社会科歴史分野の教科書記述

分析に際すの呼称については、発行年で呼ぶこととする。

中学校の教科書では、『新しい社会 歴史』(1977・1978<昭和 52・53 年>度版による)を、「1981 年度版」、『新しい社会 歴史』(1989<平成元>年度版による)を、「1993 年度版」、『新編 新しい社会歴史』(1998・1999<平成 10・11>年度版による)を、「2010 年度版」、『新編 新しい社会歴史』(2008 年・2009<平成 20・21>年度版による)を、「現行」とした。

(1) 律令国家形成期の蝦夷支配について

内容の変化が大きいのは、1993 年度版と 2010 年度版である。記述量の増加がみられ、「歴史にアクセス：蝦夷の抵抗」と題し、本文外にコラムが設けられている。コラムが設けられたことによって「蝦夷」の様子がより詳しく描かれるようになった。では、記述の内容はどうであろうか。1993 年度版までの記述には、「東北地方には、蝦夷とよばれた人々が住み、狩りや漁、馬の放牧をしながら、農耕生活も営んでいた。」とあり、「蝦夷」の生活の様子が描かれている。しかし、2006 年度版からは、蝦夷の生活の様子は見られなくなる。さらにコラムの内容をみると、「朝廷の支配領域の拡大」に抵抗した「蝦夷」について描かれている。つまり、「蝦夷」がどのような暮らしをしていた人々であったのかではなく、「蝦夷」がどのようにして国家の支配の中に組み込まれていったかに焦点が当てられており、「蝦夷」の実態は、中央政権に対する「抵抗勢力」として

描かれている。

さらに注目すべきは、コラムの「田村麻呂は、朝廷にアテルイの命を助けるように強くたのみましたが、その願いは聞き入れられず、アテルイは河内国(大阪府)で処刑されました。」という記述である。「アテルイ」と「坂上田村麻呂」のエピソードを用いて蝦夷と朝廷との争いを記述している。征夷大將軍・坂上田村麻呂は、降伏した蝦夷の首領・アテルイを入京させ、「征夷」の成果として、天皇に献上した。歴史学では、この「坂上田村麻呂」の「助命嘆願」のエピソードの究明がなされている。鈴木拓也氏によれば、坂上田村麻呂がアテルイの「助命嘆願」をした理由は、「阿弭流為の持つ権威」を「利用」するためであった¹。コラムの記述では、坂上田村麻呂の「助命嘆願」の意図は記述されていない。記述からは、敵の命を救う慈悲深い田村麻呂の姿が印象に残る。あくまで主体は、朝廷側の坂上田村麻呂であり、蝦夷側の首領であったアテルイは「抵抗勢力」として位置付けられる。朝廷と蝦夷の戦いは、蝦夷側にとってどのような意味を持ったのかといった蝦夷側の主体性が欠落している。この「蝦夷」の抵抗について鈴木拓也氏は、「国家側の論理であって、蝦夷側から見れば被害であり、悲劇である」²と述べている。蝦夷側からすれば、この争いは、支配領域を拡大させるという国家の政策によって生じた侵略戦争であった。しかし、記述をみる限りでは、蝦夷側の視点に立って「被害」や「悲劇」としてこの争いをとらえる人は少ないのではないだろうか。

A. 1981(『新しい社会 歴史』)

律令政治の立て直し(P57)

また朝廷は、東北地方の蝦夷を支配するために、坂上田村麻呂を征夷大將軍に任じて遠征させ、その勢力を広げた。

東北地方には、蝦夷とよばれた人々が住み、狩りや漁、馬の放牧をしながら、農耕生活も営んでいた。朝廷の勢力がおよんでくると、強制的に移住させられたりしたので、しばしば反乱を起こすなどして抵抗した。

B. 1993(『新しい社会 歴史』)

律令国家のしくみの変化(P59)

また朝廷は、東北地方の蝦夷を支配するために、坂上田村麻呂を征夷大將軍に任じて遠征させ、その勢力を広げた。

東北地方には、蝦夷とよばれた人々が住み、狩りや漁、馬の放牧をしながら、農耕生活も営んでいた。律令国家の勢力がおよんでくると、強制的に移住させられたりしたので、しばしば反乱を起こして抵抗した。

C. 2010(『新編 新しい社会歴史』)

平安京(P40)

同じころ、朝廷は、東北地方の蝦夷に対してたびたび大軍を送り、その勢力を広げました。しかしその後も、蝦夷は、律令国家の支配に強く抵抗し続けました。

歴史にアクセス 蝦夷の抵抗(P41)

朝廷は、東北地方に住み、朝廷の支配に従わない人々を蝦夷とよび、しばしば貢ぎ物をおさめるよう強制し、ときには武力で従わせようとしました。

これに対して、蝦夷の人々は激しく抵抗しました。胆沢地方(岩手県奥州市付近)を中心とした蝦夷の指導者のアテルイも、その一人です。789年、5万人の朝廷軍がアテルイの本拠地を攻撃しました。しかし結果は、アテルイのたくみな作戦の前に朝廷軍の惨敗に終わりました。

797年、坂上田村麻呂が征夷大將軍に任命されると、801年、4万人の朝廷軍を率いて、やっと胆沢地方を平定し、翌年、大きな胆沢城をつくりました。アテルイは、軍を率いて降伏し、捕りよとして都に連れていかれました。田村麻呂は、朝廷にアテルイの命を助けるように強くたのみましたが、その願いは聞き入れられず、アテルイは河内国(大阪府)で処刑されました。

D. 現行(『新編 新しい社会歴史』)

平安京(P48)

8世紀から9世紀にかけて、朝廷は、支配に従おうとしない東北地方の蝦夷に対してたびたび大軍を送り、特に征夷大將軍になった坂上田村麻呂の働きもあってその勢力を広げました。しかしその後も、蝦夷は律令国家の支配に強く抵抗し続けました。

歴史にアクセス 蝦夷の抵抗(P49)

朝廷は、東北地方に住み、朝廷の支配に従わない人々を蝦夷と呼び、たびたび貢ぎ物をおさめるよう強制し、ときに武力で従わせようとしました。

これに対して、蝦夷の人々は激しく抵抗しました。胆沢地方(岩手県奥州市付近)を中心とした蝦夷の指導者のアテルイも、その一人です。789年、5万人の朝廷軍がアテルイの本拠地を攻撃しました。しかし結果は、アテルイのたくみな作戦の前に朝廷軍の惨敗に終わりました。

797年、坂上田村麻呂が征夷大將軍(蝦夷を征服するために設けられた軍の総司令官)に任命されると、801年、4万人の朝廷軍を率いて、ようやく胆沢地方を平定し、翌年、大きな胆沢城をつくりました。アテルイは、軍を率いて降伏し、捕虜として都に連れていかれました。田村麻呂は、朝廷にアテルイの命を助けるように強くたのみましたが、その願いは聞き入れられず、アテルイは河内国(大阪府)で処刑されました。

(2) 武士の成長について

1993年度版まで本文中に記述されていた「奥州藤原氏」の記述が2010年度版に本文から見られなくなり、本文外に挿絵とともに、より詳細な記述がみられる。「平泉」についての研究史を見ると、1980年代後半に「北からの日本史」「北方史研究」とよばれる研究潮流がみられるようになる³。本文外とは言え、「平泉」についての記述が増え、より詳細になったのには、こうした背景があるだろう。現行の教科書では、本文中にも「平泉」に関する記載がみられるようになる。さらに、1993年度版で「大きな戦乱」と書かれていたものが、現行では「前九年・後三年合戦」と記載され、1993年度版以前に「藤原氏」とだけあった記述が「奥州藤原氏」となるなど、固有名詞が増えたことも研究成果のあらわれといえる。

現行の教科書では、「前九年・後三年合戦」をしずめた「源氏の源義家」が東日本に勢力を拡大させる過程が記述されている。また、「東北地方」で「奥州藤原氏」が力を持ったと記述されているが、その後「鎌倉幕府の始まり」と題し、「藤原氏も攻めほろぼし、全国を支配下に置きました。」としている。これらの記述からは、「源氏」が「前九年合戦・後三年合戦」をしずめ「奥州藤原氏」が築いた「平泉」を滅ぼし、鎌倉幕府を成立させるまでの一連の流れが読み取れる。つまり「源氏」が全国を支配下におく過程で、前九年合戦・後三年合戦や平泉が記述されている。源氏が主体となって記述されると、当然ながら前九年・後三年合戦の当事者である安倍氏・清原氏や奥州藤原氏の視点は欠落する。

柳原敏昭氏によれば、現在の平泉に関する研究は、奥州藤原氏とその支配領域の「自立性」や「独自性」を強調する傾向が強まっている⁴。1993年度版と2010年度版以降を比較すると、平泉についての挿絵とそれに伴う説明文が加えられている。説明文では、「金や馬などの産物と北方との交易によって栄え」とあり平泉文化についての記述が増えている。この点から平泉の「独自性」の面は強調されていると考えられる。しかし、2010年度版の「自立する勢いをもっていた藤原氏」という記述が、現行では見られなくなっている。この点から平泉の「自立性」の面は未だ不十分であると考ええる。

A. 1981(『新しい社会 歴史』)

武士の成長(P66)

11世紀の後半には、東北地方にあいついで大きな戦乱がおこったが、源義家は、東国の武士を率いてこの戦乱をしずめ、その名を高めた。

このころ、東北地方では、藤原氏を名のる豪族が勢力をひろげ、平泉(岩手県)を中心に栄えた。この奥州藤原氏が建てた中尊寺の金色堂は、浄土信仰がこの地方にひろまったことを示している。

鎌倉幕府の成立(P72, 73)

平氏をほろぼしたのち、義経は、頼朝と仲が悪くなり、奥州の藤原氏のもとにのがれた。そこで頼朝は、義経をとらえることを口実に、朝廷の許しを得て、国ごとに守護を、平氏に関係のあった荘園や公領に地頭を置いた。

B. 1993(『新しい社会 歴史』)

武士団の成長(P66, 67)

11世紀の後半になると、東北地方で二度にわたり大きな戦乱が起こった。源義家は、このときに東国の武士を率いて戦乱をしずめたので、その名を高め、広く東国の武士との間に主従関係を結んだ。このことから、源氏は東国で勢いをのばした。

なお、源義家が都に引き上げたあとの東北地方には、豪族の藤原氏が広く勢力をのばして平泉(岩手県)を中心に栄えた。

鎌倉幕府の始まり(P 79)

さらに頼朝は、義経が奥州の藤原氏のもとにのがれると、藤原氏をも攻めてほろぼし、ついに全国の軍事支配権を手に入れた。

C. 2010(『新編 新しい社会歴史』)

武士の成長と院政(P50)

11世紀後半には、東北地方の大きな戦乱をしずめた、源氏の源義家が東国に、12世紀前半には、平氏が西国に勢力をのばしました。

鎌倉幕府の始まり(P52)

さらに、義経が奥州の藤原氏のもとにのがれると、平泉を中心に栄えていた藤原氏をも攻めほろぼしました。

挿絵 平泉中尊寺金色堂内部(P53)

東北地方の豪族の藤原氏は、金や馬などの産物と、北方との交易によって栄え、浄土へのあこがれから金色堂をつくりました。頼朝は、自立する勢いをもっていた藤原氏をほろぼしてその富をにぎり、全国の軍事的支配を達成しました。

D. 現行(『新編 新しい社会歴史』)

武士団と荘園(P67)

11世紀後半には、東北地方の武士どうしの争いをきっかけにした大きな戦乱(前九年・後三年合戦)が起きました。この争いをしずめた源氏の源義家が東日本に勢力を広げ、東北地方では平泉(岩手県)を拠点に成長した奥州藤原氏が力を持ちました。

鎌倉幕府の始まり(P70)

さらに、義経が平泉の奥州藤原氏のもとにのがれると、頼朝は、義経と藤原氏も攻めほろぼし、全国を支配下に置きました。

挿絵 3. 中尊寺金色堂(P67)

奥州藤原氏は、金や馬などの産物と北方との交易によって栄え、浄土へのあこがれから中尊寺に金色堂を建てました。

(3) 戊辰戦争について

1981年度版には「会津藩(福島県)」「東北地方の諸藩を攻め」、1993年度版には「会津藩(福島県)」と東北地方に関する記述が見られていたが、2010年度版以降ではそのどちらも見られない。東北諸藩の動向は本文中では把握できないため、手がかりは地図のみである。

河西英通氏によれば、東北地方における戊辰戦争の意味を「未開」性の付与であるとしている。近代において「未開」とは、「軍事的敗者」のことを指している。つまり、新政府軍に敵対し、朝敵となった「奥羽越列藩同盟」は、天皇に歯向かう「未開」な地域としての意味を付与した⁵。

2010 年度版以前と現行を比較すると、本文外に戊辰戦争の新政府軍と旧幕府軍の進路・退路・主な戦地などを記載した地図が追加されている。その中で、旧幕府軍の同盟地域として「奥羽越列藩同盟」が色塗りされており、同盟の名称は出てきていないものの、東北諸藩が新政府軍と旧幕府軍のどちらに所属していたかが分かるようになっている。しかし、地図からの情報だけでは、戊辰戦争の意味まで掘り下げて考えることは出来ない。よって、戊辰戦争が東北にとってどのような意味があったかなどは読み取ることは困難であるとする。

A. 1981(『新しい社会 歴史』)

戊辰戦争と新政府(P208)

さらに新政府に反対する会津藩(福島県)をはじめ、東北地方の諸藩を攻め、最後に函館にたてこもった旧幕府軍を降伏させた。この戦争を戊辰戦争とよんでいる。

B. 1993(『新しい社会 歴史』)

大政奉還と王政復古(P207)

さらに幕府への信義を守ろうとする会津藩(福島県)などを攻め、翌年には函館に立てこもった旧幕府軍を降伏させた。この戦争を戊辰戦争とよんでいる。

C. 2010(『新編 新しい社会歴史』)

大政奉還と王政復古(P137)

新政府軍は、軍を集めて江戸城をあけわたさせ、翌年には旧幕府軍をすべて降参させました(戊辰戦争)。

D. 現行(『新編 新しい社会歴史』)

大政奉還と王政復古(P159)

新政府は、江戸城を明けわたさせ、その後も軍を進めて、翌年には函館(北海道)で旧幕府軍を最終的に降伏させ、国内を平定しました。こうした旧幕府軍と新政府軍との戦いを戊辰戦争といいます。

挿絵 6. 戊辰戦争



(4) 昭和恐慌

現行には、「身売り」や「欠食児童」についての記述が見られるようになり、2010 年度版以前と比べても、記述量は増えている。現行の本文では、昭和恐慌が原因で起こった大凶作が「身売り」や「欠食児童」といった社会問題を引き起こしたという理解ができるだろう。戸坂潤氏が、東北飢饉の際の「身売り」の問題について「子女の安売りは日本では何も今日に始まったことではなく、又必ずしも農村だけに限られている現象でもない」⁶としたように「身売り」した女性は、凶作時の東北地方だけではなかった。本文の記述からは、「身売り」が北海道地方や東北地方にのみ存在したかのような印象を受ける。

本文外の「7. 東北地方の不況」の写真は、1934 年の凶作時の写真である。大根をかじる子どもの姿が教科書に記載されることによって、東北地方が貧しい地域であったことを印象付けられる。河西氏は、この写真を凶作のイメージとして取り上げた背景には、大根をかじる子どもの姿を非日常の光景だと認識した都市部の人々の目線があったことを指摘している。また、この大根をかじる子どもの様子は、東北地方や凶作時ということに限らず、日常的な風景であったとも指摘している⁷。教科書に見られる東北の人々の「日常的な風景」は、本文のききんとつながることで、貧しい「後進地」としての東北地方のイメージやより悲劇的な東北のイメージが印象付けられるだろう。

河西英通氏によれば、「東北＝後進地」という認識が社会的に定着するのは、20 世紀に入ってからだという⁸。中でも「大凶作」による影響は大きいだろう。1910 年代初頭に、大都市部や地方都市部に近代工場制が導入され、産業革命がなされる一方、東北地方では、米作に特化した第一次産業発達していく。米作に特化した結果、東北地方は幾度となく冷害の危険にさらされることとなった。この凶作に対して、国は「東北救済」をかねて東北振興事業を行った。しかしそれはあくまで日中戦争が開始された中で、国家総動員資源政策の一環として、東北の「開発」を国策として行ったものであった⁹。こういった過程で東北地方は、都市部への労働力人員・食糧の供給源となっていく。都市部への労働力の流出や「米作モノカルチャー」¹⁰という東北が担ってきた供給地としての役割に、天災が加わり引き起こされたのが東北の大凶作であった。このような背

景があったことは教科書からは読み取れない。

東北振興事業は、戦時中に限らず幾度も行われている。そのたび、東北は「東京」への資源供給地としての役割を強化していくことになる。つまり、この東北大凶作の記述は、「振興」や「開発」という名目で行われてきた、東京からの外部資本の進出と包摂であった。また、東京への資源供給地としての東北が形成されていく過程であった。大凶作に関する記述は、東北の歴史的 positioning を考える上で重要な手掛かりになる。しかし、そのことを記述から読み取るとはできない。あくまで昭和恐慌の影響のあおりを受け、被害に遭った「後進地域」なのである。歴史のなかで構築されてきた東北地方の positioning を読み取ることは出来ない。

A. 1981(『新しい社会 歴史』)

日本経済のいきづまり(P272)

1931年(昭和6年)には、東北地方や北海道地方に、冷害による大凶作がおそった。

B. 1993(『新しい社会 歴史』)

日本経済の行きづまり(P269)

そのうえ、1931年(昭和6年)には、東北地方や北海道に、冷害による大凶作がおそった。

C. 2010(『新編 新しい社会歴史』)

世界恐慌と日本経済(P185)

特に東北と北海道は大凶作にみまわれました。

D. 現行(『新編 新しい社会歴史』)

昭和恐慌(P216)

大凶作に見まわれた東北地方と北海道では、さきんが occurred。借金のための女性の「身売り」や、学校に弁当を持っていけない「欠食児童」が、社会的な問題になりました。

挿絵 7.東北地方の不況



第2節 高等学校地理歴史科日本史Bの教科書記述

高等学校の教科書については、『新 詳説日本史』(1977・1978(昭和52・53)年度版より)を、「1988年度版」、『詳説日本史 改訂版』(1989(平成元)年度版による)を、「1998年度版」、『詳説日本史改訂版』(1998・1999(平成10・11)年度版による)を、「2007年度版」、『詳説日本史 改訂版』(2008年・2009(平成20・21)年度版による)を、「現行」とした。

高等学校の教科書記述内容は、中学校の記述内容と比較してより詳細になっている。中学校ではすべての子どもが日本史を学習するため、中学校の教科書を主軸として分析を行うのだが、東北に関する歴史教育の動向を探るうえで高等学校との関連も視野に入れ分析を行う。

(1) 律令国家形成期の蝦夷支配について

1998年度版に本文外に「蝦夷と隼人」と題してコラムが設けられていたが、2007年度版以降見られなくなっている。代わりに、より詳細になったのは、「平安遷都と蝦夷との戦い」と題した「蝦夷征討」についてである。1998年度版以前の蝦夷征討についての記述に見られる人物名は「斉明天皇」「阿倍比羅夫」の二人であった。それに対し、2007年度版以降には、その二人に加え「光仁天皇」「伊治咥麻呂」「桓武天皇」「紀古佐見」「阿弭流為」「坂上田村麻呂」の人物が書き加えられている。さらに、1998年度版以前の蝦夷征討の中央政府側の拠点として挙げられた「淳足柵」「磐舟柵」「秋田城」「多賀城」に、2007年度版以降に「胆沢城」「紫波城(志波城)」が書き加えられている。名称が増えるだけでなく、「城柵は、政庁や実務をおこなう役所群・倉庫群が配置され、行政的な役所としての性格を持ち、そのまわりに関東地方などから農民(柵戸)を移住させて開拓が進められた。」とあるように「城柵」の概要がつかめるようになっている。これらは、東北古代史、とりわけ東北の城柵に関する研究の成果であろう。

コラムの中で「伊治咥麻呂」の記述が見られる。蝦夷の豪族であった伊治咥麻呂が乱を起こしたという内容である。朝廷に帰順し国家の政策に協力していた「伊治咥麻呂」が反乱を起こしたきっかけは、朝廷側の人物から「蝦夷」とであると差別を受けたことである¹¹。本文中では、「光仁天皇の780(宝亀11)年には帰順した蝦夷の豪族伊治咥麻呂が乱をおこし、一時は多賀城をおとしいれて焼くという大規模な反乱に発展した。」とある。この記述からは「伊治咥麻呂」が朝廷側から受けた差別や侮蔑についての記述は見られず、朝廷に反乱を起こした謀反人としての「伊治咥麻呂」が印象付けられる。「伊治咥麻呂」の視点、つまり蝦夷側の視点が含まれていない。「平安遷都と蝦夷との戦い」は、「蝦夷征討」を中心に書かれているが、その主体は朝廷側であり、「蝦夷征討」を行いながら支配領域を拡大していく朝廷勢力の様子が記述されている。2007年度版以降、本文で蝦夷について「政府が蝦夷とよんだ東北地方の在地の人びと」と記述が見られる。この記述からは蝦夷＝東北地方の在地の人々という理解ができる。もちろん蝦夷の理解自体は合っている。しかし、伊治咥麻呂の乱のエピソードと関連付けられることによって「蝦夷」＝朝廷に

抵抗した人々という理解になり、さらには抵抗勢力＝東北地方の人々の姿が印象付けられることも考えられる。

a. 1988(『新 詳説日本史』)

平城京と国土の開発(P47)

充実した国力を背景に、政府は領域の拡大にもつとめた。東北地方に住み、当時の朝廷から異民族とみなされていた蝦夷は、7世紀ころから政略の対象とされるようになり、大化の改新後まもなく、征討のための基地として、北陸に淳足・磐舟の2柵が設けられた。つづいて斉明天皇の時代には、阿倍比羅夫が秋田地方の蝦夷を服属させた。8世紀にはいると蝦夷の征討はいっそう進み、日本海側には出羽国がおかれ、ついで秋田城がきずかれ、太平洋側にも多賀城がきずかれた。

「蝦夷と隼人」(P47)

東北地方はもともと自然の富にめぐまれ、狩猟・漁撈・採取の活動が盛んで、縄文時代の終わりにくころには、とくにその北部を中心に亀ヶ岡文化がさかえた。その後、農耕文化が西日本を中心に発展し、近畿地方に基盤をもつ大和政権を中心に国家が形成されてくるにつれて、東北地方に住む人々は、朝廷から異種の文化をもつ異民族として扱われ、蝦夷とよばれるようになった。九州地方に住む隼人も、蝦夷と同様に異民族とみなされ、武力や芸能で朝廷に奉仕するようになった。

中央集権国家が発展するのに応じて、朝廷は蝦夷を服属させようとはかり、ときには武力を用いてこれを征討した。8世紀にはいると、蝦夷の社会でも農耕が進み、有力な豪族がうまれてきた。8世紀の終わりにしきりに起こった蝦夷の反乱は、このような豪族にひきいれられた蝦夷が、朝廷による支配の強化に抵抗しておこしたものである。

b. 1998(『詳説日本史 改訂版』)

平城京と国土の開発(P49, 50)

充実した国力を背景に、政府は領域の拡大にもつとめた。東北地方に住み、当時の朝廷から異民族とみなされていた蝦夷は、7世紀ころから征討の対象とされるようになり、大化の改新後、支配のための拠点として、北陸に淳足・磐舟の2柵が設けられた。つづいて斉明天皇の時代には、阿倍比羅夫が秋田地方の蝦夷を服属させた。さらに8世紀にはいると、蝦夷の支配はいっそう進み、日本海側には出羽国がおかれ、ついで秋田城がきずかれ、太平洋側にも多賀城がきずかれた。

「蝦夷と隼人」(P49)

東北地方はもともと自然の富にめぐまれ、狩猟・漁撈・採取の活動が盛んで、縄文時代の終わりにくころには、とくにその北部を中心に亀ヶ岡文化がさかえた。その後、弥生前期には、日本海を経由して青森県津軽地方にまで稲作が行われていた。しかし近畿地方に基盤をもつ大和政権を中心に国家が形成されてくるにつれて、東北地方に住む人々は、朝廷から異種の文化をもつ異民族として扱われ、蝦夷とよばれるようになった。九州南部に住む隼人も、蝦夷と同様に異民族とみなされ、武力や芸能で朝廷に奉仕するようになった。

中央集権国家が発展するのに応じて、朝廷は蝦夷を服属させようとはかり、ときには武力を用いてこれを征討した。8世紀にはいると、蝦夷の社会でも有力な豪族がうまれてきた。8世紀の終わりにしきりに起こった蝦夷の反乱は、このような豪族にひきいれられた蝦夷が、朝廷による支配の強化に抵抗しておこしたものである。

c. 2007(『詳説日本史改訂版』)

平城京と地方社会(P 40, 41)

国家体制が実現し、充実した力を持った中央政府は、支配領域の拡大にもつとめた。政府が蝦夷とよんだ東北地方の在地の人びとに対しては、唐の高句麗攻撃により、対外的緊張が高まった7世紀半ばに、日本海側に淳足柵・磐舟柵を設けた。斉明天皇の時代には阿倍比羅夫が遣わされ、秋田地方などさらに北方の蝦夷と関係を結んだ。しかし、政府の支配領域はまだ日本海側沿いの拠点にとどまっていた。8世紀になると、軍事的な制圧政策が進められた。日本海側には出羽国がおかれ、ついで秋田城がきずかれ、太平洋側には陸奥国府となる多賀城がきずかれて、それぞれ出羽・陸奥の政治や蝦夷対策の拠点となった。

平安京の確立と蝦夷の戦い(P 51, 52)

東北地方では、奈良時代にも北上川や日本海沿いを北上して城柵が設けられていった。城柵は、政庁や実務をおこなう役所群・倉庫群が配置され、行政的な役所としての性格を持ち、そのまわりに関東地方などから農民(柵戸)を移住させて開拓が進められた。こうして城柵を拠点に、蝦夷地域への支配の浸透が進められた。しかし、光仁天皇の780(宝亀11)年には帰順した蝦夷の豪族伊治咥麻呂が乱をおこし、一時は多賀城をおとしいれる大規模な反乱に発展した。この後、東北地方では三十数年にわたって戦争があいついだ。

桓武天皇の789(延暦8)年には紀古佐美を征東大使として大軍を進め、北上川中流の胆沢地方の蝦夷を制圧しようとしたが、族長阿豆流為の活躍により政府軍が大敗する事件もおこった。その後、坂上田村麻呂が征夷大將軍となり、田村麻呂は802(延暦21)年に胆沢地方に胆沢城をきずき、阿豆流為を帰順させて鎮守府を多賀城からここに移した。翌年には北上川上流に紫波城を築造し、東北経営の前進拠点とした。日本海側でも、米代川流域まで律令国家の支配権がおよぶことになった。

d. 現行(『詳説日本史 改訂版』)

地方官衙と「辺境」(P 48, 49)

律令にもとづく国家体制が実現し、充実した力を持った中央政府は、支配領域の拡大にもつとめた。政府が蝦夷とよんだ東北地方の在地の人びとに対しては、唐の高句麗攻撃により対外的緊張が高まった7世紀半ばに、日本海側に淳足柵・磐舟柵を設けた。斉明天皇の時代には阿倍比羅夫が遣わされ、秋田地方などさらに北方の蝦夷と関係を結んだ。しかし、政府の支配領域はまだ日本海側沿いの拠点にとどまっていた。8世紀になると、軍事的な制圧政策が進められた。日本海側には712(和銅5)年に出羽国がおかれ、ついで秋田城が築かれ、太平洋側にも7世紀後期の城柵に続けて陸奥国府となる多賀城がきずかれて、それぞれ出羽・陸奥の政治や蝦夷対策の拠点となった。

平安遷都と蝦夷との戦い(P 60)

東北地方では、奈良時代にも陸奥側では多賀城を基点として北上川沿いに北上して城柵を設け、出羽側では秋田城を拠点に日本海沿いに勢力を北上させていった。城柵は、政庁を中心として外郭の中に実務をおこなう役所群・倉庫群が配置され、行政的な役所としての性格を持ち、そのまわりに関東地方などから農民(柵戸)を移住させて開拓が進められた。こうして城柵を拠点に、蝦夷地域への支配の浸透が進められた。しかし、光仁天皇の 780(宝亀 11)年には帰順した蝦夷の豪族伊治些麻呂が乱をおこし、一時は多賀城をおとしいて焼くという大規模な反乱に発展した。こののち、東北地方では三十数年にわたって戦争があいついだ。

桓武天皇の 789(延暦 8)年には紀古佐美を征東大使として大軍を進め、北上川中流の胆沢地方の蝦夷を制圧しようとしたが、蝦夷の族長阿弭流為の活躍により政府軍が大敗する事件もおこった。その後、征夷大將軍となった坂上田村麻呂は、802(延暦 21)年胆沢地方に胆沢城をきずき、阿弭流為を帰順させて鎮守府を多賀城からここに移した。翌年にはさらに北上川上流に志波城を築造し、東北経営の前進拠点とした。日本海側でも、米代川流域まで律令国家の支配権がおよぶことになった。

(2) 武士の成長

1998 年度版には「源氏の進出」「鎌倉幕府」と題して記述されていたものが、2007 年度版に「院政期の社会」と題して、地方の武士の成長が書き加えられている。地方の武士の成長の一例として、平泉に関する記述が見られる。さらにその「院政期の社会」の記述も 2007 年度版と現行を比較すると、現行がより詳細な記述となっている。これは、平泉研究の進展の成果だと考えられる。2011 年に平泉が世界遺産に登録されたことも要因の一つとして考えられるだろう。

現行に「前九年合戦」と「後三年合戦」の二つが記述されている。「前九年合戦」に関しては「源頼信の子頼義は陸奥守として任地に下り、子の源義家とともに東国の武士をひきいて安倍氏と戦い、出羽の豪族清原氏の助けを得て安倍氏をほろぼした(前九年合戦)」とある。この記述からは、「源頼義」「源頼義」の活躍に焦点が当てられている。つまり、源氏が主体となっている。「後三年合戦」については、「陸奥守であった源義家が介入し、藤原(清原)清衡を助けて内紛を制圧した(後三年合戦)」とある。源頼義の子である源義家の活躍が見られ、源氏が主体となっている。このように、源氏が主体となる記述が見られ、前九年・後三年合戦の当事者であった安倍氏や清原氏側の視点は見られない。鎌倉幕府成立までの一過程で存在した地方勢力として、安倍氏や清原氏が挙げられているにすぎず、源氏の活躍の中に補足的に位置づけられていると考える。そう考えれば「院政期の社会」と題した記述内容もやはり、鎌倉幕府成立までの一過程にすぎない。平泉の勢力範囲や概要が記述されているが、源氏が主体となる以上、平泉は鎌倉幕府の成立以前に滅亡した東北地方の一政権であり、奥州藤原氏は一地方豪族である。本文では、平泉がどのような政権であったか、「独自の文化」とはどのような文化であったのか、平泉の権力構造は鎌倉幕府と相違点など、平泉勢力の実態の把握は難しい。

a. 1988(『新 詳説日本史』)

武士の成長(P79, 80)

このころ、陸奥では豪族安倍氏の勢力が強大で、国司と争っていた。源頼信の子頼義は陸奥守・鎮守府將軍として任地にくんだり、子の源の頼義とともに東国の武士を率いて安倍氏と戦い、出羽の豪族清原氏のたすけをえてようやくこれをほろぼした(前九年の役)。その後、安倍氏にかわって陸奥・出羽両国で大きな勢力をえるようになった清原氏一族に内紛がおこった。当時、陸奥守だった義家はこれを介入し、藤原清衡をたすけて内紛を平定した(後三年の役)。これらの戦いをつうじて源氏は東国武士団との主従関係を強め、武家の棟梁としての地位をかためた。

奥羽地方ではこれ以後、陸奥の平泉を根拠地とする藤原清衡の支配が、強大となり、子基衡・孫秀衡と3代100年にわたって奥州藤原氏が富強をほこることになった。

鎌倉幕府(P92)

そののち頼朝は、逃亡した義経をかくまったとして奥州藤原氏をほろぼし、1192(建久3)年、法皇の死後には、ついに念願の征夷大將軍に任ぜられた。

b. 1998(『詳説日本史 改訂版』)

源氏の進出(P80)

また、陸奥では豪族安倍氏の勢力が強大で、国司と争っていたが、源頼信の子頼義は陸奥守として任地にくんだり、子の源の頼義とともに東国の武士を率いて安倍氏と戦い、出羽の豪族清原氏のたすけを得てほろぼした(前九年の役)。その後、陸奥・出羽両国で大きな勢力を得た清原氏一族に内紛がおこると、陸奥守だった義家はこれを介入し、藤原(清原)清衡をたすけて内紛を平定した(後三年の役)。これらの戦いをつうじて源氏は東国武士団との主従関係を強め、武家の棟梁としての地位をかためた。東国武士団のなかには義家に土地を寄進して保護を求めるものがふえたため、政府があわててこれを禁止したほどである。

また義家の去ったあとの奥羽地方では、陸奥の平泉を根拠地として藤原清衡の支配が強大となった。清衡・基衡・秀衡の3代100年にわたって奥州藤原氏は、金や馬などの産物の富によって京都の文化を移入したり、北方の地との交易を行って独自の文化を育て、繁栄をほこった。

鎌倉幕府(P91, 92)

そののち頼朝は、逃亡した義経をかくまったとして奥州藤原氏をほろぼし、1190(建久元)年には上洛して右近衛大將となり、1192(建久)年、法皇の死後には、ついに念願の征夷大將軍に任ぜられた。

c. 2007(『詳説日本史改訂版』)

源氏の進出(P75)

また、陸奥では豪族安倍氏の勢力が強大で国司と争っていたが、源頼信の子頼義は陸奥守として任地に下り、子の源義家とともに東国の武士をひきいて安倍氏と戦い、出羽の豪族清原氏のたすけを得て安倍氏をほろぼした(前九年合戦)。その後、陸奥・出羽両国で大きな勢力を得た清原一族に内紛がおこると、陸奥守であった源義家が介入し、藤原(清原)清衡をたすけて内紛を平定した(後三年合戦)。こののち奥羽地方では清衡の子孫による支配が続いたが、一方でこれらの戦いを通じて源氏は東国武士団との主従関係を強め、武家の棟梁としての地位を固めていった。

院政期の社会(P83)

地方では各地の武士が館をきずいて、一族や地域の結びつきを強めるようになり、なかでも奥羽地方では、陸奥の平泉を根拠地として藤原清衡の支配が強大となった。奥州藤原氏は、清衡・基衡・秀衡の3代100年にわたって、金や馬などの産物の富で京都文化を移入したり、北方の地との交易によって独自の文化を育て、繁栄を誇った。

鎌倉幕府(P89,90)

その後、頼朝は逃亡した義経をかくまったとして奥州藤原氏を滅ぼすと、1190(建久元)年には念願の上洛が実現して右近衛大将となり、1192(建久3)年、後白河法皇の死後には、征夷大將軍に任じられた。

d. 現行(『詳説日本史 改訂版』)

源氏の進出(P84)

また、陸奥では豪族安倍氏の勢力が強大となり、国司と争っていたが、源頼信の子頼義は陸奥守として任地に下り、子の源義家とともに東国の武士をひきいて安倍氏と戦い、出羽の豪族清原氏の助けを得て安倍氏をほろぼした(前九年合戦)。その後、陸奥・出羽両国で大きな勢力を得た清原一族に内紛がおこると、陸奥守であった源義家が介入し、藤原(清原)清衡を助けて内紛を制圧した(後三年合戦)。こののち奥羽地方では陸奥の平泉を根拠地として清衡の子孫(奥羽藤原氏)による支配が続くが、一方でこれらの戦いを通じて源氏は東国武士団との主従関係を強め、武家の棟梁としての地位を固めていった。

院政期の社会(P90)

地方では各地の武士が館を築き、一族や地域の結びつきを強めるようになった。なかでも奥羽地方では、藤原清衡が奥六郡(岩手県)の支配権を握ると、陸奥の平泉を根拠地として支配を奥羽全域に広げていった。奥州藤原氏は、清衡・基衡・秀衡の3代100年にわたって、金や馬などの産物の富で京都文化を移入したり、北方の地との交易によって独自の文化を育て、繁栄を誇った。

鎌倉幕府(P97)

その後、頼朝は逃亡した義経をかくまったとして奥州藤原氏を滅ぼすと、1190(建久元)年には念願の上洛が実現して右近衛大将となり、1192(建久3)年、後白河法皇の死後には、征夷大將軍に任ぜられた。

(3) 戊辰戦争

1998 年度版以前に「東北諸藩を鎮圧」という文言が、2007 年度版には「東北諸藩の抵抗を打ち破り」に変わっている。また、1998 年度版以前の「反政府派」という文言が 2007 年度版からは見られなくなっている。「鎮圧」という文言は、東北諸藩が起こした引き起こした混乱を新政府軍が鎮めたという印象を受ける。さらに、「反政府派」と書かれているように新政府に対峙する抵抗勢力としての会津藩が書かれている。新政府軍に敵対する「朝敵」としての東北諸藩の姿が強く打ちだされているように思う。しかし、2007 年度版以降では、それらの文言が改められたことは評価できる。

重要なのは、中学校の教科書同様、本文では東北地方における「戊辰戦争」の意味が読み取れない点である。新政府軍に敗北した「奥羽越列藩同盟＝東北」は天皇に歯向かった朝敵であり、近代においては、それが「未開」とであるとされた。東北の「未開」イメージは、戊辰戦争を経て、固定化していった。そういった東北地方における戊辰戦争の意味を教科書の記述からは見出すことはできない。

a. 1988(『新 詳説日本史』)

戊辰戦争(P238)

さらに奥羽越列藩同盟を結成した東北諸藩を鎮圧して、9 月には反政府派の中心とみられた会津若松城を攻め落とした。

b. 1998(『詳説日本史 改訂版』)

戊辰戦争と新政府の発足(P237)

さらに奥羽越列藩同盟を結成した東北諸藩を鎮圧して、9 月には反政府派の中心とみられた会津若松城を攻め落とした。

c. 2007(『詳説日本史改訂版』)

戊辰戦争と新政府の発足(P 237)

さらに東征軍は、奥羽越列藩同盟を結成した東北諸藩の抵抗を打ち破り、9 月にはその中心とみられた会津若松城を攻め落とした。

d. 現行(『詳説日本史 改訂版』)

戊辰戦争と新政府の発足(P 260)

さらに東征軍は、奥羽越列藩同盟を結成した東北諸藩の抵抗を打ち破り、9 月にはその中心とみられた会津若松城を攻め落とした。

(4)昭和恐慌

どの年代とも大きな変化はない。中学校の教科書では、「北海道」とあったが、高校の教科書では「東北」に限定されている。前述したように、近代化の過程で、東北は都市部への労働力人員・食糧の供給地となっていく。東北の冷涼な気候という自然的な要因もあるが、こうした歴史的な背景も「大凶作」の要因である。本文では「農業恐慌」の原因をこうした歴史的背景とともに考えると困難である。

a. 1988(『新 詳説日本史』)

金解禁と世界恐慌(P309, 310)

不況のために兼業の機会の少なくなったうえ、都市の失業者が帰農したから、東北地方を中心に農家の困窮は著しく、欠食児童や婦女子の身売りが続出した。

b. 1998(『詳説日本史 改訂版』)

金解禁と世界恐慌(P312)

不況のために兼業の機会の少なくなったうえ、都市の失業者が帰農したため、東北地方を中心に農家の困窮は著しく、欠食児童や婦女子の身売りが続出した。

c. 2007(『詳説日本史改訂版』)

金解禁と世界恐慌(P 320)

不況のために兼業の機会も少なくなったうえ、都市の失業者が帰農したため、東北地方を中心に農家の困窮は著しく(農業恐慌)、欠食児童や女子の身売りが続出した。

d. 現行(『詳説日本史 改訂版』)

金解禁と世界恐慌(P 344)

不況のために兼業の機会も少なくなったうえ、都市の失業者が帰農したため、東北地方を中心に農家の困窮は著しく(農業恐慌)、欠食児童や女子の身売りが続出した。

(5)縄文人の暮らし

先述した通り、三内丸山遺跡に関する記述は、(1)から(4)の時代より前の時代ではあるが、取り扱っている教科書が1998・1999(平成10・11)年度版による教科書と現行の教科書に限られているため(5)として分析を行うこととした。

1998 年度版と 2007 年度版を比較すると、「さらに青森県三内丸山遺跡のように集合住宅と考えられる大型の竪穴住居が伴う場合もある」という文言が加えられている。これは、1992 年から本格的に始まった青森県三内丸山遺跡の発掘調査の成果が教科書記述に反映されたものであろう。

三内丸山遺跡では、1992 年の調査開始以来、従来の縄文時代の常識を覆す様々な発見がなされている。正確な人数については様々な説があるが、一時、500 人程度の人々が三内丸山遺跡に居住していたとも考えられている。さらに、クリを植栽し管理しており、初歩的な農耕を営んでいたとする考え方もある¹²。また、従来発見されてきた竪穴住居の 30 倍ともいわれる規模の大型の竪穴住居も発見されている¹³。従来の縄文人は、他の時代と比較して、文化度の低い暮らしをしていたと考えられていた。三内丸山遺跡はその常識を一変させ、縄文人の文化的な豊かさを示す遺跡として注目を集めてきた。

教科書の記述を見てみると、1998 年度版から現行に至るまで基本的に変化はない。2007 年度版から三内丸山遺跡に関する文言が加えられている。「青森県三内丸山遺跡のように集合住宅と考えられる大型の竪穴住居が伴う場合もある」とあり、縄文時代の遺跡の例として三内丸山遺跡があげられている。三内丸山遺跡に関する記述が見られ評価できる。しかし、前述したような従来の常識を覆した三内丸山遺跡の特異性は見られない。三内丸山遺跡が日本列島に広まった縄文文化の一要素にすぎないという見方もできるのではないだろうか。

2009 年から世界遺産登録を目指している「北海道・北東北の縄文遺跡群」では 17 の構成資産の中に三内丸山遺跡がある¹⁴。縄文時代の北海道・北東北地域では「独特の地域文化圏が繁栄し」、一部の文化は「近畿・中四国地域や九州地域に至るまで影響を及ぼした」とされている¹⁵。同時代の日本列島における文化の中心ともいべき文化圏の存在が明らかにされている。北海道や東北地域の縄文世界の解明が進み、北海道や東北地方の別世界性が言われるようになった。記述では「縄文人の生活と信仰」と題し、従来の縄文人の生活の一事例として三内丸山遺跡があげられている。縄文人の生活の様子を一括りにしている、つまり一般化していると考えられる。ここからは、歴史学の成果にあるような三内丸山遺跡の特異性は読み取ることは出来ない。すでに三内丸山遺跡をはじめ北海道や北東北の文化は、従来の縄文文化と一般化できないほど特異な事例である。縄文人の生活を一般化し、記述することはすでに困難な段階にあると考える。

b. 1998(『詳説日本史 改訂版』)

縄文人の生活と信仰(P14)

それは広場をかこんで数軒の竪穴住居が環状にならぶものが多く、住居だけでなく、食料を保存するための貯蔵穴群や墓地、さらに集会所ないし共同作業場と考えられる大型の竪穴住居がともなう場合もある。これらのことから、縄文時代の社会を構成する基本的な単位は、4～6 軒程度の世帯からなる 20～30 人ほどの集団であったらしい。

c. 2007(『詳説日本史改訂版』)

縄文人の生活と信仰(P10)

それは広場を囲んで数軒の竪穴住居が環状に並ぶものが多く、住居だけでなく、食料を保存するための貯蔵穴群や墓地、さらに青森県三内丸山遺跡のように集合住宅と考えられる大型の竪穴住居が伴う場合もある。これらのことから、縄文時代の社会を構成する基本的な単位は、4～6軒程度の世帯からなる20人～30人ほどの集団であったらしい。

d. 現行(『詳説日本史 改訂版』)

縄文人の生活と信仰(P14)

それは、広場を囲んで数軒の竪穴住居が環状に並ぶものが多く、住居だけでなく、食料を保存するための貯蔵穴群や墓地、さらに青森県三内丸山遺跡のように集合住宅と考えられる大型の竪穴住居が伴う場合もある。これらのことから、縄文時代の社会を構成する基本的な単位は、4～6軒程度の世帯からなる20人～30人ほどの集団であったと考えられている。

第3節 教科書分析に関する考察

以上のように、中学校と高等学校の東北に関する教科書記述の考察を行ったが、このことを踏まえ全体的な考察を行う。

まず、(1)から(5)の各部分について大まかに振り返る。(1)の律令国家形成期の蝦夷支配については、朝廷の支配領域拡大に伴う蝦夷征伐についての記述がなされている。中央側からみた「蝦夷の抵抗」が「蝦夷」の側から見ればどのような意味を持ったのか、蝦夷とはどのような人々であったのかなど蝦夷側の視点が欠落している。一貫して蝦夷＝中央政府に抗った抵抗勢力というような記述がなされている。(2)の武士の成長については、鎌倉幕府成立までの流れが記述されている。東北に関する記述は、前九年・後三年合戦の2つの合戦や平泉政権について記述がなされている。しかし、あくまで源氏が主体であり、東北に関する記述は、鎌倉幕府の成立までの一過程にすぎないという印象が強い。(3)の戊辰戦争については、東北諸藩の動向がほぼ記述されておらず、位置づけが不明確である。(4)の昭和恐慌による東北大凶作については、過酷な自然環境に住む貧しい東北地方の人々のような印象をうける。「大凶作」から見えてくる東北の歴史的な位置づけとは何だったのかなど東北地方の人々の視点が見られない。(5)の縄文人の暮らしについては、従来の縄文人の生活様式と三内丸山遺跡を同列に扱っている。縄文時代の人々の暮らしを一般化し、三内丸山遺跡が有した特異性を読み取れるような記述は見られない。

全体的に見れば、やはり東北の視点が欠落している。「東北の歴史」は、「国家の物語」を記述するうえで必要最低限の形で位置づけられている。つまり、中央から見た東北像が読み取れる。

「東北の自立性」や「東北の独自性」といった主体性が見られることはなく、歴史学の成果が十分に反映されていないと考える。歴史学ではすでに「一国史」的な見方から脱却し、東北独自の論理で歴史を構築しようとする試みが見られる。「地域」の視点からみた歴史や国家の枠組みを相対化するといった「一国史」的な見方から脱却した記述内容は見られない。教科書記述を見る限り「一国史」的な見方が未だ強く残っている。そこから読み取れる東北像は、中央に対して従属的な東北像だろう。鈴木拓也氏が言うように「悲劇的な」東北像や河西英通氏が言うような「後

進地」としての東北ではないだろうか。東北独自の論理で歴史を構築しようとする試みが歴史学では行われているが、歴史教科書では未だ「一国史」から抜け出せていない。教科書の記述にあるような「一国史」的な歴史では、「東北」の視点で歴史を構築することは難しい。

一方で、教科書の記述から離れ、授業を作成しようとする試みも見られる。地域史学習等の授業実践である。しかし、そういった実践を行っている教員は少数派であることが現状である。ほとんどの教員は、やはり教科書に依拠して授業を作成しているのではないだろうか。特に中学校においては、歴史学の成果を踏まえながら教材化を図るのは困難だと考える。歴史学の成果を踏まえるならば、教員側のある程度以上の専門的な知識が要求されるだろう。中学校では地理、歴史、公民と3つの分野を「社会科」として学ばせている。そのため歴史学を専門的に学んだ教員は高校の教員に比べ少なくなる。その点から教科書の記述内容を離れ、独自の授業実践を行うことは難しいと考える。さらに現場の教員は、高校入試や大学入試の入学試験を意識して授業を行っている。教育課程のカリキュラム上、授業時数には制約がある。入試を意識しながら、決められたカリキュラム内で授業を行うとすれば、教員が独自に地域を教材化していくような試みにもと困難が生じる。

歴史教科書は、中学校ではすべての子どもが使用し、高校では選択制ではあるものの、多くの子どもが使用している。教科書の記述内容は、子どもの歴史認識形成に大きな影響を与える。東北の主体性の欠如は、中学校と高等学校のどちらの教科書にも当てはまることを考えれば、中央に従属的な東北像は、中学校での学習を踏まえ、高校でより強固な歴史認識として形成されていくことも考えられる。

教科書の記述には、国家を前提とした歴史像、「一国史」的な見方が根底にあることが分かった。歴史学では「一国史」からの脱却が言われているにも関わらず、教科書の記述には変化が見られない。歴史を構築する際、国家を前提に考えた場合、おのずと地域の主体性は欠落していく。東北からの視点で歴史が記述されていないのはこうした背景があった。中央に対しての地方の従属的な関係性の形成要因の一つとして「一国史」から脱却できていない歴史教育の現状があった。

以上のような分析結果を踏まえて、東北史の研究成果を視野に入れながら、今後どのような歴史教育あるいは歴史学習の在り方が考えられるのか、次章以降で検討していきたい。

¹ 鈴木拓也(2016)「光仁・桓武朝の征夷」『三十八年戦争と蝦夷政策の転換』(東北の古代史 4), pp. 55-56, 吉川弘文館

² 上記1に同じ, p. 50

³ 柳原敏昭(2015)「序—平泉とは何か」『平泉の光芒』(東北の中世史 1), p. 5, 吉川弘文館

⁴ 上記3に同じ, p. 7

⁵ 河西英通(2001)『東北一つくられた異境』(中公新書 1584), p. 10, 中央公論新社

⁶ 戸坂潤(1979)『戸坂潤全集』(戸坂潤全集別巻), p. 193, 勁草書房

⁷ 河西英通(2007)『続・東北—異境と原境のあいだ』(中公新書 1889), p. 67, 中央公論新社

⁸ 上記7に同じ, p. 184

⁹ 岡田知弘(2013)「災害と開発から見た東北史」『生存の東北史—歴史から問う 3. 11』大門正克・岡田知弘・川内淳史・河西英通・高岡裕之編, p. 23, 大月書店

¹⁰ 河西英通(2013)「近代日本と東北・東北人論」『生存の東北史—歴史から問う 3. 11』大門正克・岡田知弘・川内淳史・河西英通・高岡裕之編, p. 81, 大月書店

¹¹ 上記1と同じ, p. 18

¹² 小島圭二(1997)「1 三列の山並みがわかるみちのくの風土」『日本の自然 地域編』2, 小島圭

二, 田村俊和, 菊池多賀夫, 境田清隆編, 岩波書店

¹³ 国立歴史民俗博物館(2001)「特別史跡指定記念 縄文文化の扉を開く—三内丸山遺跡から縄文列島へ—」p. 24, 青森県教育委員会

¹⁴ 縄文遺跡群世界遺産登録推進事務局「北海道・北東北の縄文遺跡群」, 2018年1月17日
<http://jomon-japan.jp/overview/1-2/> (2018年1月29日閲覧)

¹⁵ ユネスコ世界遺産センター「北海道・北東北を中心とした縄文遺跡群」, 2009年1月5日
<http://jomon-japan.jp/wp-content/uploads/2013/07/Jomon-Archaeological-Sites-in-Hokkaido-Northern-Tohoku.pdf> (2018年1月29日閲覧)

第3章 「中央」と「地方」の関係性の再構築に向けた歴史学習の在り方

第1節 戦後歴史教育のあゆみ

本章では、教科書分析をもとに東北を主体に置いた歴史学習の在り方を考えていく。

まず初めに、一度、教科書の記述内容から離れ、戦後の歴史教育の試みをたどりながらおおまかに見ていく。前章まで東北に関する教科書記述の分析を行い、「一国史」的な見方が教科書記述に見られ、東北地域の主体性が欠如していることを指摘した。歴史学では、「一国史」からの脱却を目指した多くの研究がある。では、歴史教育ではどのようなことが議論されているのだろうか。本節では、現在に至るまで歴史教育ではどのようなことが議論され、どのような研究や実践がなされてきたのかを見ていく。その際、本研究の視点である「中央」と「地方」の関係性を中心に、それに関係のある事象について見ていく。

(1)「国体論的歴史観」からの脱却

戦前の歴史教育については、黒羽清隆氏や家永三郎氏が第六期の国定教科書の分析を行っている。黒羽氏は、『初等科国史』の分析から、戦中の歴史教育が大東亜戦争へ「収斂・帰着」を促していたと指摘している¹。また、家永三郎氏が言うように、神話などの「超科学的」²な事象によって、「国体」を位置づけようとする国家の歴史教育に対する価値観があった。つまり、戦前の歴史教育は、「国体論」と強く結びつき、太平洋戦争の戦時下における「精神動員の手段」³として歴史教育に用いられたのである。

戦後、歴史教育はこのような「国体論的歴史観」⁴からの脱却が目指された。それは「皇国史観」や「天皇中心史観」と呼ばれる歴史観からの脱却でもあった。同時に、「歴史学の成果」にもとづいた歴史教育、つまり科学的な歴史教育が目指されるなど、非科学的な事象を改善しようとする試みも見られるようになる⁵。

『くにのあゆみ』は、1946年に発行された文部省著作の国史教科書である。敗戦後に初めて公式に使用された教科書であり、『くにのあゆみ』の編纂過程には「国家主義社会の担い手」から「民主主義社会の担い手」を育成しようとする歴史教育の転換が見られた⁶。加藤章氏は『くにのあゆみ』を「国体観念からの脱却」をめざしたものであったとしている⁷。そこには戦前・戦中の歴史教育の反省があった。

その後、天皇を中心とした歴史観は払拭されたものの、支配者層を中心とした歴史があるとの指摘がなされた。つまり「中央中心史観」や「一国史観」からの脱却である。

現在の教科書記述では「皇国史観」や「天皇中心史観」に基づくような記述は見られなくなった。しかし、近年の歴史教育研究を見ると、「皇国史観」や「天皇中心史観」の影響は改善されたものの、「国家の物語」としての歴史教育は未だ残っているという現状がある。角田将士氏は、『くにのあゆみ』による歴史学習について、事象の描かれ方は変化しても、「子どもたちに受容させるべき大きな物語」であったことは、戦前の歴史学習と比較して、原理的に違いはないと指摘している⁸。土屋武志氏は、「明治期における国家観が投影された歴史教育内容構成原理」が「今日の学校教育でも基本的に継承されている」と指摘している⁹。近代国家日本が国民に求めた国家観、つまり、「中央中心」的な解釈に基づく歴史教育内容が『くにのあゆみ』以後も変化せず、現在も維持されていると考えられる。とりわけ東北地方に関する教科書記述については、前章で見たように、中央の歴史との関係で記載されることが多く、「日本国」の発展の過程で記述されたものが

多い。

(2) 地域からの視点

前述したように戦後歴史教育では「国体論的歴史観」からの脱却が目指された。それは「皇国史観」や「天皇中心史観」の脱却でもあった。そこで焦点があてられたのは地域や民衆の視点であった。戦後、こういった視点から歴史を構築しようと「地方史」研究に注目が集まった。戦前からお国自慢的な郷土史研究の反省を踏まえ、地方史は科学性を重視した研究が行われた。地方史の題材となったのは主に市町村史や県史であった。しかしその後、1960年代半ばから、「地方史」が中央史の枠組みを脱却できていないという指摘がなされる。中央史は、支配者層から見た歴史、つまり「中央中心史観」や「一国史観」によって構成されている。そこには地域の主体性の欠落があった。市町村史や県史は、国家の枠組みを前提とした歴史であって中央史に従属したものであった。そうした中で地方史の問題点が指摘され始めた1960年代半ばから「地域史」が注目を集めるようになる。¹⁰

加藤氏は、「地域史」研究について「中央史」に対する「地方史」の従属感を脱却する手立てとして認識されたと述べている¹¹。また東北の視点から歴史を構築しようと試みた日本中世史研究者である入間田宣夫氏も「地域史」が国民国家の発展を描く「一国史」的な歴史像の概念に対する立場であった述べている¹²。「地域史」は地域の独自性に焦点を当てたものであった。「地域」に焦点を当てた歴史教育は、早くは1969年の第21回の歴史教育者協議会報告会で見られる。この報告会に端を発したいわゆる「地域に根ざす歴史教育」はその後さらに活発に議論されるようになる¹³。1997年の第49回の歴史教育者協議会報告会(宮城大会)¹⁴での「地域に根ざす一本の道」や2004年の第56回の歴史教育者協議会報告会(山形大会)¹⁵での「足もとから世界へ」というテーマでの地域実践報告があるように地域の独自性に焦点を当てた教育研究や実践が試みられてきた。このように、「地域史」によって歴史教育の面から歴史を再構築しようとする動きが現在まで活発に行われてきた。

東北地方の歴史を考える際に参考になるのは、「北海道」と「沖縄」の地域史や地域史教育であろう。両者は東北地方と同じく周縁と位置付けられていた時代があった。

北海道の地域史教育の一例として、「アイヌ民族教育」について見てみよう。「アイヌ民族」は東北地方と同様に、日本の辺境とされていた北海道に存在する先住民族である。北海道歴史教育者協議会による「日本国民とされたアイヌの人たち」¹⁶や『『四つの口』と松前藩』¹⁷などの教育実践や、北海道教育委員会や札幌市教育委員会による副読本『アイヌ民族：歴史と現在』(アイヌ文化財団)を使用したアイヌ民族教育など多くの試みが見られる。このように北海道では、地域史学習として「アイヌ民族教育」が歴史教育の中で積極的に行われている。これらは日本の辺境とされてきた場所から日本史像を構築しようとする試みである。

「蝦夷」もまた日本の辺境とされていた土地に存在した人々である。しかし、周知の通り、アイヌ人は、国際的にも認知されている日本の「先住民族」である。それに対して東北の人々も「蝦夷」と呼ばれていた時期があったが、熊谷公男氏の言うように「蝦夷」は「古代国家が特定の時期に政治的意図から設定した種族概念」¹⁸であり、私たち東北に住む人々が自己認識として「蝦夷」を自称することはできない。さらに、蝦夷がどの地域に住み、どのような出自を持った人々であったのかは時期的な変動があり複雑である¹⁹。よって、東北の人々＝「蝦夷」として一括りにす

ることは難しい。アイヌと東北の人々の歩んできた歴史には根本的な違いがあり、地域史学習において「アイヌ民族教育」のように、東北地方の歴史について共通した教材にすることは困難である。「アイヌ民族」と「蝦夷」の違いを考えれば、東北地域の多様性が見えてくるのではないだろうか。東北人＝「蝦夷」と一括りにできないということはそれだけ多種多様な人間が住んでいたということである。「一国史」を相対化する上で、東北地方の人々の多様性に着目することは今後も重要な焦点となっていく。

さらにここで、沖縄(琉球)に関する地域史を事例についても触れていく。沖縄(琉球)を含む九州地方南部地域もまた東北地方と同様に日本の辺境に位置づけられてきたという歴史がある。古くは「隼人」征伐に見られるように中央政権から征伐される対象として位置づけられていた時代があった。特に琉球については、琉球王国と平泉との類似性が指摘されている²⁰。北海道・東北から日本史像を構築しようとする「北からの日本史」と呼ばれる研究潮流があったことは先にも述べた。それと同様に、九州地方南部以南の地域から日本史像を構築しようとする「南からの日本史」と呼ばれる研究潮流が見られるようになる²¹。「北からの日本史」では北海道、東アジアを視野に入れた研究が進んでいるように、「南からの日本史」でも、東アジアや東南アジアにまで視野を広げた研究も見られる。沖縄(琉球)は東北地域と類似した歴史を持ち、同じ日本の辺境とされた。その沖縄(琉球)に関する歴史教育実践は、東北地域の地域史学習を試みる際の手がかりとなるであろう。

(3) 東アジアの中の日本

「一国史観」からの脱却の試みとして「地域史」の発展があった。一方で、同じく「一国史」的な枠組みを相対化し、広く東アジア世界にまで視野を広げようとする試みが見られるようになる。1984年の東アジア歴史教育シンポジウムから始まる一連の歴史研究²²である。1990年からの日韓合同歴史教科書研究会の活動²³や2005年に日中韓3国共通歴史教材編纂委員会によって編纂された『未来をひらく歴史—東アジア3国の近現代史—』(高文研)や2006年に歴史教育者協議会と全国歴史教師の会によって編纂された『向かい合う日本と韓国・朝鮮の歴史—前近代編—』(青木書店)などの日韓共通歴史教科書作成などの試みが例として挙げられる。1980年代半ばから現在に至るまで、東アジアを視野に入れた歴史教育の試みは盛んに議論されている。

加藤章氏は、戦後歴史学の発展を振り返り「戦前の皇国史観」や「唯一絶対の国体観」から解放をもたらすと述べている。さらに「日本の歴史を日本人のみならず、アジアそして世界人類とのつながりの中でとらえなおそうとしている」と述べている²⁴。現在の歴史教育では「日本国」という枠組みを相対化し、歴史を構築する動きが盛んに言われている。

東北についても歴史学の進展と連動するように中国や朝鮮半島との密接なつながりをもとに東北を東アジアとのかかわりからとらえなおそうとする動きが見られる。2004年の歴史教育者協議会発刊の『東アジアと東北』が例として挙げられる。「東アジアからの視点に基づく東北の歴史の再構成」²⁵が現場の教員からも提起されている。

以上大まかに、戦後の歴史教育の試みをたどってきた。戦後、皇国史観や天皇中心史観の克服が目指された。そこには科学性の欠如や民衆の主体性の欠落があった。克服の手段として焦点が

あてられたのが「地域」や「民衆」の視点であった。戦前からの郷土史や地方史に注目が集まり地域や民衆からみた歴史像の構築が進められた。しかし、地域や民衆の視点といっても「日本国」という国家の枠組みから脱しきれず、中央の歴史に従属した地域の歴史であった。そこで「中央中心史観」や「一国史観」と呼ばれる支配者層の歴史を見直す動きがあった。注目を集めたのが「地域史」であった。地域から歴史像を構築していく試みは、「中央」に対置された「地方」ではなく、地域それぞれの主体性が強調された。現在に至るまで「地域」を軸にした研究や教育実践が多く試みられている。

また国家の姿を前提とした歴史像を見直すために、東アジア世界にまで視野を広げた試みも見られるようになった。「国民国家」の枠組みを相対化しようとする動きがあったことが理解できる。現在までに日本や中国、韓国での教科書開発や研究会の発足などが試みられている。

以上のように現在まで、歴史学と同様に、「一国史」的な見方をやめ、「地域」からの視点や国家の枠組みを越えた歴史教育が求められてきた。

第2節 東北を軸にした歴史学習の視点

教科書分析や歴史教育の動向の考察から、歴史教育が、「中央」と「地方」の従属的な関係の構築の一要因となっていることが明らかになった。本節では、「中央」と「地方」の関係性の再構築に向けた東北地方に関する歴史教育の在り方について検討をしてみたい。

対象としては中学校の歴史分野に絞った。その理由は以下である。

高等学校では、2022年から「歴史総合」の導入が検討されている。「歴史総合」は、その方向性を「世界とそこにおける日本を広く相互的な視野から捉えて、現代的な諸課題の形成に関わる近現代の歴史を考察する科目」²⁶としているように、近現代史を重視する傾向が強い。さらに「歴史総合」を学んだ子どもは、選択教科として、「日本史探求」と「世界史探求」のどちらかを選ぶことになる²⁷。つまり、子どもが、「日本史探求」を選択しなければ、東北の歴史はおろか、前近代の歴史を学ぶ機会はなくなる。「日本国」の領域が明確に示されたのは近代に入ってからで、前近代においては、「日本国」という枠組みは存在せず、現在とは違った領域をもった様々な地域が相互に関連しながら成り立っていた。近代以降の学習では、地域から「日本国」を相対化して考えるのは難しい。「日本国」を相対化して考え、様々な地域の視点から歴史を考えるためには前近代の学習が有効であると考えている。そのためすべての子どもが前近代の学習を行う中学校での歴史学習について考えたい。

東北史研究の蓄積は、歴史を「一国史」的に見方で構築することの困難さを浮き彫りにした。歴史教育でも「一国史」的な見方を解消しようとする動きが見られる。私もこの動きに賛同したい。それにはまず「日本国」という国家の枠組みを前提した通史学習をやめることを提案する。第2章の教科書分析では、東北が中央視点での歴史に従属的であり、主体性がないことが明らかとなった。「一国史」的な通史学習を行えば、子どもにとって東北は、中央の歴史の従属的な位置づけとして印象付けられる。そこに東北の主体性は見られない。子どもが東北地方の歴史を主体的に考えるには、「一国史」的な通史学習をやめるべきだ。また「一国史」的な通史学習では、子どもが住む地域から遠く離れた場所で起こった出来事を学ぶ。自分の住む地域と離れるほど、子どもとの直接的な関わりは薄れる。その結果、子どもが授業に対して受け身になったり、知識として単なる暗記になったりしてしまう。子どもたちが自分たちと直接かかわる地域の歴史から歴

史を構築することが重要である。東北の歴史を主体的に考えるには、「地域」の視点が必要であろう。また、「中央」と「地方」という二項対立で歴史を捉えるのではなく、様々な地域を関連させながら歴史を構築するような学習が望ましい。

現状では地域史学習がもっとも有効な手立てとして考えられる。もちろん、地域史学習といっても単純に地域の歴史を理解するだけではない。自らの住む地域の歴史について理解を深めると同時に、日本列島内の各地域の出来事と関連させて考える必要がある。子どもが自分たちの住む地域の歴史に対して理解を深め、その地域の課題を考える歴史学習を目指したい。他地域と比較しながら自分なりの歴史像を構築する。地域について理解を深める過程で、子どもは、自分の住む地域を客観的に見る視点を養うことが出来る。

「中央」と「地方」の関係性の再構築に向けた地域史学習では次に挙げる次のような視点を持つ必要がある。

- ① 自分の住む地域について理解する視点
- ② 自分の住む地域と日本列島内の地域を比較する視点

①では、子どもが自分たちの住む地域から歴史を構築するために、まずその地域の歴史について理解を深める。自分住む地域がどのような過程を経て、現在に至るのかを子どもが考えることが重要である。子どもたちは自分の住む地域を軸にし、歴史を構築していく視点である。なお、自分の住む地域とは、共通の文化や価値観あるいは課題をもつ地域であり、固定化されるものではない。

②では、自分たちの住む地域とその他の地域とを関連付けて歴史を考えていく。自分の住む地域との相対化を図り、自分たちの住む地域からの一面的な理解にとどまらず、他の地域との相対化しながら歴史を構築していく。「中央」から見た歴史だけでなく、現状の課題を踏まえて、東北地方の側からみ見た歴史を考察していく視点である。

以上のような視点から、自分の住む地域の歴史を考えることで、子どもが独自の歴史像を構築することが出来る。構築された歴史は「中央」の歴史に「地方」の歴史が従属するような関係性ではなく対等な関係である。子どもが自分の地域を相対化してとらえ、自分なりの東北像、ひいては日本像を構築していくことが出来る。

第3節 東北を軸にした歴史学習の問題点

「中央」と「地方」の関係性の再構築に向けた歴史学習の在り方についての私の主張は以上である。本節では、東北を軸にした歴史学習を提案する中で生じた問題点を挙げたい。

問題点は、以下の二つである。

一つ目は「地域史学習」を進める上での教科書の限界性である。歴史教科書では、中央の歴史を主に記述しており、「地域史学習」で扱われるような地域史の内容は教科書に記述には見られない。歴史教科書に記述されている内容をもとに授業を構成すれば「地域」から視点が欠落していく。歴史の教科書の持つ影響力を考えれば、教科書記述の見直しや書きかえが必要なのだが、現状教科書は教育制度上、検定制がとられるなど、見直しや書きかえは困難である。また、すべて

の子どもが学ぶ歴史を前提にして記述されており、ある特定の「地域」に焦点を当てた教科書記述は難しい。それらを考えれば、現場の教員の「地域史学習」の試みが必要になってくるだろう。

「地域」を題材にした積極的な教材開発と教育実践が目指されるべきである。その際の視点としてまず、自分の住む地域について理解を深める。次に、他地域と関連させながら歴史学習を進めていく。教員は、普段の授業の中でも、これらの視点を意識した授業を行う。他地域を学習しながら、常に自分の地域と結びつけて考えるような授業を行うことで、自分の住む地域を常に意識して考える事ができるだろう。

二つ目は、歴史学習の在り方を論じる際、「東北」という地域の多様性を考慮するに至らなかったことである。本論文では「東北」をテーマに歴史学習の在り方を論じてきた。しかし、執筆の過程で「東北」の多様性が浮き彫りになった。東北といっても、岩手県と青森県でも歴史や文化は異なる。また、同じ岩手県内でも沿岸部の釜石市と内陸部の盛岡市でも違う。東北という地域を一括りにできない。それは東北とは何かという根本的な疑問につながった。さらにはその疑問を歴史教育の中で子どもと考えていくにはどのような試みが必要なのだろうかという課題点を残した。本論文ではこうした東北の多様性を踏まえ、たどり着いたのが「地域」から視点であった。

「地域史学習」を試みつつ、東北という地域の多様性を歴史教育の中でどのように扱うかが今後課題となっていくだろう。

¹ 黒羽清隆(1982)「皇国史観の国史教育 第六期国定教科書を中心として」、加藤章・佐藤照雄・波多野和夫編『歴史教育の歴史』(講座・歴史教育), pp. 214-232. 弘文堂

² 家永三郎(1982)「3 国史—所収教科書の解説」『復刻 国定教科書(国民学校期)解説』pp. 118-119, ほるぷ出版

³ 角田将士(2003)「戦前期中学校国史教科書における歴史認識形成の論理—国家政策に応じた歴史教育内容修正—」『社会科研究』59, p. 61, 全国社会科教育学会

⁴ 加藤章(2013)「第1章 戦前の歴史教育—国体論的歴史教育—」『戦後歴史教育論—日本から韓国へ—』p. 10, 東京書籍

⁵ 本郷隆盛(2012)「戦後歴史学と歴史教育—歴史に向き合う心・その二—」『年報日本思想史』, p. 91, 日本思想史研究会

⁶ 角田将士(2010)「戦後初期歴史教科書『くにのあゆみ』における歴史認識形成の論理—戦前国定国史教科書との断絶と連続性—」『社会科教育論議』47, p. 14, 全国社会科教育学会

⁷ 加藤章(1979)「社会科歴史論の成立過程—戦後歴史教育論の分析—」『長崎大学教育学部教科教育学研究報告』3, p. 1, 長崎大学教育学部

⁸ 上記1に同じ, pp. 21-22

⁹ 土屋武志(1997)「歴史教育における『自国(日本)』イメージ—歴史的変遷と今後の課題—」『愛知教育大学研究報告』46, p. 11, 愛知教育大学

¹⁰ 西垣晴次(1982)「地域の歴史像」『歴史教育の理論』(講座・歴史教育3), 加藤章・佐藤照雄・波多野和夫編, pp. 181-195, 弘文堂

¹¹ 上記5に同じ, pp. 202-203

¹² 入間田宣夫(2000)「全国史の再解釈と地域主義」『宮城歴史科学研究』49, p. 10, 宮城歴史科学研究会

¹³ 歴史教育者協議会(1979)『地域に根ざす歴史教育の創造—歴教協30年の成果と課題—』pp. 172-173, 明治図書出版

¹⁴ 歴史教育者協議会(1997)「特集歴教協第49回宮城大会報告集」『歴史地理教育』569, 歴史教育者協議会

¹⁵ 歴史教育者協議会(2004)「特集歴教協第56回山形大会報告集」『歴史地理教育』677, 歴史教育者協議会

-
- ¹⁶ 平井敦子(2009)「『日本国民』とされたアイヌの人たち」『北の大地から未来への発信』北海道歴史教育者協議会編，北海道歴史教育者協議会
- ¹⁷ 千葉誠治(2009)「『四つの口』と松前藩」『北の大地から未来への発信』北海道歴史教育者協議会編，北海道歴史教育者協議会
- ¹⁸ 熊谷公男(2004)『蝦夷の地と古代国家』(日本史リブレット 11)，pp16，山川出版社
- ¹⁹ 上記 18 に同じ，pp. 14－21
- ²⁰ 入間田宣夫・豊見山和行(2002)『北の平泉，南の琉球』(日本の中世 5)，網野善彦・石井進編，中央公論新社
- ²¹ 柳原敏昭(2002)「『北からの日本史』と『南からの日本史』と」『北の環日本世界一書きかえられる津軽安藤氏一』村井章介・斉藤利男・小口雅史編，p. 204，山川出版社
- ²² 比較史・比較歴史教育研究会(2015)『「自国史と世界史」をめぐる国際対話—比較史・比較歴史教育研究会 30 年の軌跡—』ブイツーソリューション
- ²³ 上記 6 に同じ，p. 282
- ²⁴ 上記 5 に同じ，p. 19
- ²⁵ 川崎利夫(2004)「序説 今なぜ『東アジアと東北か』」『東アジアと東北』歴史教育者協議会東北ブロック編，pp. 1－16，教育史料出版会
- ²⁶ 教育課程部会高等学校の地歴・公民科科目の在り方に関する特別チーム(2016)「高等学校学習指導要領における歴史科目の改訂の方向性」文部科学省
- ²⁷ 上記 1 に同じ

終章 おわりに

本論文では、「中央」と「地方」の関係性の再構築に向けた歴史学習の在り方を考えてきた。

はじめに、「地方」が「中央」に対して構築してきた従属関係の構築の過程を歴史教育によるものであるという仮説を立てた。

第1章では、東北に関する歴史学の研究成果から近年の東北史研究について考察を行った。歴史学では「一国史」からの脱却が試みられていることがわかった。

第2章では、東北に関する歴史教科書記述の分析を行った。その際、第1章の歴史学の動向と比較しながら考察を試みた。分析から、東北の歴史が、中央の歴史に対して従属的な位置付けであるという結果が得られた。そこに東北の主体性はなく、あくまで中央の歴史に対して補足的な位置付けであった。このことから歴史教育が従属関係の構築の一要因となっていたことが明らかになった。

第3章では、「中央」と「地方」の関係性の構築に向けた歴史学習を提案した。まず初めに現在までの歴史教育の動向について整理を行った。歴史学と同様に、歴史教育の側面からも「一国史」からの脱却が試みられ、地域からの視点や東アジアの中で歴史を構築する試みがあることが分かった。それらの試みを踏まえて、歴史学習の在り方の検討では、地域からの視点を軸に、子どもが自分の住む地域の歴史と他地域の歴史を比較し、独自の歴史像を構築していく段階を提案した。以上から、東北が中央に対して従属的な関係を再構築する歴史学習の手立てを提案することが出来た。

以下で課題を本研究の課題を2点述べたい。

一つ目は、東北を軸にした具体的な教材開発にまで至らなかった点である。本論文では、「中央」と「地方」の関係性の再構築に向けた学習の在り方として、「地域史」の視点や子どもの学習段階まで述べた。しかし、現状の教育課程の中で、提案したような試みが可能であるのか教材開発を通して実証するに至らなかった。教材研究を重ね、前節で挙げたような視点や段階を踏まえながら教材開発を試みたい。

二つ目は、子どもの歴史認識に対する調査と分析を行うに至らなかった点である。本論文では、教科書記述をもとに従属的な関係性の構築の要因として歴史教育を挙げた。実際に、子どもが歴史教育を受けて、東北の歴史に対してどのような歴史認識を持っているのか、あるいはどのような東北像を構築しているのか調査することが出来なかった。今後現場の教員として子どもの意識調査等を試みたい。

本論文では、東北地方に関する歴史教育について考えたのだが、そこから見えてくる東北像は、「東北地方」と一括りにできないほど多種多様なものであった。東北の多様性を理解したうえで、主体性をもって東北の歴史像を構築できれば、「地域」として対等な関係性を築くことができ、「中央」と「地方」の従属的な関係を再構築することにつながるだろう。

私自身、この論文を執筆するまで歴史教育の中に「一国史」的な見方があるとは気づかなかった。私が受けた歴史教育にはこうした歴史観が根底にあって、自分の住んでいる地域に焦点が当てられることはなかった。私は、教科書に記述されていることを「自分が歩んできた歴史」として学んでいたのである。学部時代に「日本国」を相対化して考えるような歴史学を学んだ。大学に入学する以前に学んだ歴史にはなかった視点であって、学部時代に学んだ歴史との間に違和感

を覚えるのは当然であった。

この論文を執筆する過程で東北地方が置かれてきた歴史的な位置づけと現在の東北地方が抱える課題について学ぶことができた。それらを考えることは、東北地方に住む人間としての役割だと思う。さらに、それを子どもたちとともに考え続けていくことは、その地域に住む歴史教育者としての責任である。

来年度から私は、岩手県の中学校教師として教壇に立つ。本論文を執筆する過程で学んだことは、これから教師人生を歩んでゆく私にとって大きな財産となった。教壇に立つ前に気付くことができて良かったと思う。

本論文を執筆するにあたって、多くの方々から助言や指導を頂いた。特に、忙しい中、時間を割き、指導して下さった篠塚明彦氏に感謝を申し上げたい。

今後も歴史教育者として研究と実践を積み重ね、子どもとともに地域の歴史を考え、地域の歴史を学ぶ意味を考えてつづけていくという決意を表明して論文を締めくくる。

参考文献

- ・山下祐介(2016)「地方創生言説のなかの地域学」(日本社会科教育学会シンポジウム発表資料)
- ・古川美穂(2015)『東北ショック・ドクトリン』岩波書店
- ・河西英通(2001)『東北一つくられた異境一』(中公新書 1584), 中央公論新社
- ・西垣晴次(1982)「地域の歴史像」『講座・歴史教育—歴史教育の理論—』(講座・歴史教育 3), 加藤章・佐藤照雄・波多野和夫編, 弘文堂
- ・入間田宣夫(2000)「全国史の再解釈と地域主義」『宮城歴史科学研究』49, 宮城歴史科学研究会
- ・加藤章(2013)『戦後歴史教育論—日本から韓国へ—』東京書籍
- ・歴史教育者協議会(1979)『地域に根ざす歴史教育の創造—歴教協 30 年の成果と課題—』明治図

書出版

- ・歴史教育者協議会(1997)「特集歴教協第49回宮城大会報告集」『歴史地理教育』569, 歴史教育者協議会
- ・歴史教育者協議会(2004)「特集歴教協第56回山形大会報告集」『歴史地理教育』677, 歴史教育者協議会
- ・寺田肇(2004)「農民の生活が見えてくる地域の掘り起こしを—『民次郎一揆』を学年劇に—」『歴史地理教育』678, 歴史教育者協議会
- ・高橋祐子(2005)「日韓の絆をつくった人権弁護士『布施辰治』」『歴史地理教育』691, 歴史教育者協議会
- ・一戸富士雄(1977)「東北の地域史をとらえて日本全史を再構築する視点」『歴史地理教育実践選集』33, 新興出版社
- ・産経新聞「28年度中学教科書」産経ニュース, 2015年10月31日
<http://www.sankei.com/life/news/151031/lif1510310017-n1.html> (2018年1月29日閲覧)
- ・内外新聞「17年度高校教科書採択状況—文科省まとめ(上)」, 2017年1月20日
https://www.jiji.com/service/senmon/educate/backnumber_doc/e170120.html (2018年1月29日閲覧)
- ・榎森進(1988)「研究史の整理と課題」『北からの日本史』北海道・東北史研究会編, 三省堂
- ・古田良一博士還暦記念会編(1955)『東北史の新研究』文理図書出版
- ・伊東信雄(1955)「考古学上から見た東北古代史文化」『東北史の新研究』古田良一博士還暦記念会編, 文理図書出版社
- ・遠藤進之助(1955)「戊辰東北戦争の分析—維新東北政治史の一断章として—」『東北史の新研究』古田良一博士還暦記念会編, 文理図書出版社
- ・高橋富雄(1955)「東北古代の開拓」『東北史の新研究』古田良一博士還暦記念会編, 文理図書出版社
- ・豊田武編(1967)『東北の歴史 上巻<原始, 古代, 中世編>』吉川弘文館,
- ・工藤雅樹(1972)「東北古代史の再検討」『歴史』42, 東北史学会
- ・小林清治・大石直正編(1978)『中世奥羽の世界』東京大学出版会
- ・柳原敏昭(2002)『北からの日本史』と『南からの日本史』と『北の環日本世界書きかえられる津軽安藤氏』村井章介・斉藤利男・小口雅史編, 山川出版社
- ・長谷川成一(1979)「北方辺境藩研究序説」『弘前大学国史研究』68・69 合併号, 弘前大学国史研究会
- ・阿部保志(2000)「地理歴史科における地域史の教材化—北海道史における地域と国家・乙部品川牧場を事例に—」『社会科教育研究』84, 日本社会科教育学会
- ・阿子島香(2015)「北の原始時代」『東北の古代史』(東北の古代史1), 吉川弘文館
- ・高橋充(2016)「東北近世の胎動」『東北の中世史』(東北の中世史5), 吉川弘文館
- ・鈴木拓也(2016)「光仁・桓武朝の征夷」『三十八年戦争と蝦夷政策の転換』(東北の古代史4), 吉川弘文館
- ・柳原敏昭(2015)「序—平泉とは何か」『平泉の光芒』(東北の中世史1), 吉川弘文館
- ・戸坂潤(1979)『戸坂潤全集』(戸坂潤全集別巻), 勁草書房
- ・河西英通(2007)『続・東北—異境と原境のあいだ』(中公新書1889), 中央公論新社
- ・岡田知弘(2013)「災害と開発から見た東北史」『生存の東北史—歴史から問う3.11』大門正克・岡田知弘・川内淳史・河西英通・高岡裕之編, 大月書店
- ・河西英通(2013)「近代日本と東北・東北人論」『生存の東北史—歴史から問う3.11』大門正克・岡田知弘・川内淳史・河西英通・高岡裕之編, 大月書店
- ・小島圭二(1997)「1 三列の山並みがわけるみちのくの風土」『日本の自然 地域編』2, 小島圭二, 田村俊和, 菊池多賀夫, 境田清隆編, 岩波書店
- ・国立歴史民俗博物館(2001)「特別史跡指定記念 縄文文化の扉を開く—三内丸山遺跡から縄文列島へ—」, 青森県教育委員会
- ・縄文遺跡群世界遺産登録推進事務局「北海道・北東北の縄文遺跡群」, 2018年1月17日
<http://jomon-japan.jp/overview/1-2/> (2018年1月29日閲覧)
- ・ユネスコ世界遺産センター「北海道・北東北を中心とした縄文遺跡群」, 2009年1月5日

<http://jomon-japan.jp/wp-content/uploads/2013/07/Jomon-Archaeological-Sites-in-Hokkaido-Northern-Tohoku.pdf> (2018 年 1 月 29 日閲覧)

- ・黒羽清隆(1982)「皇国史観の国史教育 第六期国定教科書を中心として」, 加藤章・佐藤照雄・波多野和夫編『歴史教育の歴史』(講座・歴史教育), 弘文堂
- ・家永三郎(1982)「3 国史—所収教科書の解説」『復刻 国定教科書(国民学校期)解説』ほるぷ出版
- ・角田将士(2003)「戦前期中学校国史教科書における歴史認識形成の論理—国家政策に応じた歴史教育内容修正—」『社会科研究』59, 全国社会科教育学会
- ・加藤章(2013)「第1章 戦前の歴史教育—国体論的歴史教育—」『戦後歴史教育論—日本から韓国へ—』東京書籍
- ・本郷隆盛(2012)「戦後歴史学と歴史教育—歴史に向き合う心・その二—」『年報日本思想史』日本思想史研究会
- ・角田将士(2010)「戦後初期歴史教科書『くにのあゆみ』における歴史認識形成の論理—戦前国定国史教科書との断絶と連続性—」『社会科教育論議』47, 全国社会科教育学会
- ・加藤章(1979)「社会科歴史論の成立過程—戦後歴史教育論の分析—」『長崎大学教育学部教科教育学研究報告』3, 長崎大学教育学部
- ・土屋武志(1997)「歴史教育における『自国(日本)』イメージ—歴史的変遷と今後の課題—」『愛知教育大学研究報告』46, 愛知教育大学
- ・西垣晴次(1982)「地域の歴史像」『歴史教育の理論』(講座・歴史教育3), 加藤章・佐藤照雄・波多野和夫編, 弘文堂
- ・平井敦子(2009)「『日本国民』とされたアイヌの人たち」『北の大地から未来への発信』北海道歴史教育者協議会編, 北海道歴史教育者協議会
- ・千葉誠治(2009)「『四つの口』と松前藩」『北の大地から未来への発信』北海道歴史教育者協議会編, 北海道歴史教育者協議会
- ・熊谷公男(2004)『蝦夷の地と古代国家』(日本史リブレット11), 山川出版社
- ・入間田宣夫・豊見山和行(2002)『北の平泉, 南の琉球』(日本の中世5), 網野善彦・石井進編, 中央公論新社
- ・比較史・比較歴史教育研究会(2015)『「自国史と世界史」をめぐる国際対話—比較史・比較歴史教育研究会30年の軌跡—』ブイツーソリューション
- ・川崎利夫(2004)「序説 今なぜ『東アジアと東北か』」『東アジアと東北』歴史教育者協議会東北ブロック編, 教育史料出版会
- ・教育課程部会高等学校の地歴・公民科科目の在り方に関する特別チーム(2016)「高等学校学習指導要領における歴史科目の改訂の方向性」文部科学省

資料：使用教科書対応表

学習指導要領	中学校 (『新しい社会』東京書籍)	高等学校 (『詳説日本史』山川出版社)
○1977・1978(昭和52・53)年度版 中学校 1981年から全面実施 高等学校 1982年学年進行で実施 1984年完全実施	『新しい社会 歴史』 (使用期間 1981～1983)	『新 詳説日本史』 (使用期間 1988～1991)
○1989(平成元)年度版 中学校 1993年から全面実施 高等学校 1994年学年進行で完全実施 1996年完全実施	『新しい社会 歴史』 (使用期間 1993～1996)	『詳説日本史 改訂版』 (使用期間 1998～2005)
○1998・1999(平成10・11)年度版 中学校 2002年から全面実施 高等学校 2003年学年進行で実施 2005年完全実施	『新編 新しい社会歴史』 (使用期間 2006～2011)	『詳説日本史改訂版』 (使用期間 2007～2016)
○2008・2009(平成20・21)年度版(現行) 中学校 2012年全面実施 高等学校 2013年学年進行で実施 2015年～完全実施	『新編 新しい社会歴史』 (使用期間 2016～)(現行)	『詳説日本史 改訂版』 (使用期間 2017～)(現行)

教科書記述（中学校）

(1) 律令国家形成期の蝦夷支配について

A.1981	<p>律令政治の立て直し(P57)</p> <p>また朝廷は、東北地方の蝦夷を支配するために、坂上田村麻呂を征夷大將軍に任じて遠征させ、その勢力を広げた。</p> <p>東北地方には、蝦夷とよばれた人々が住み、狩りや漁、馬の放牧をしながら、農耕生活も営んでいた。朝廷の勢力がおよんでくると、強制的に移住させられたりしたので、しばしば反乱を起こすなどして抵抗した。</p>
B.1993	<p>律令国家のしくみの変化(P59)</p> <p>また朝廷は、東北地方の蝦夷を支配するために、坂上田村麻呂を征夷大將軍に任じて遠征させ、その勢力を広げた。</p> <p>東北地方には、蝦夷とよばれた人々が住み、狩りや漁、馬の放牧をしながら、農耕生活も営んでいた。律令国家の勢力がおよんでくると、強制的に移住させられたりしたので、しばしば反乱を起こして抵抗した。</p>
C.2010	<p>平安京(P40)</p> <p>同じころ、朝廷は、東北地方の蝦夷に対してたびたび大軍を送り、その勢力を広げました。しかしその後も、蝦夷は、律令国家の支配に強く抵抗し続けました。</p> <p>歴史にアクセス 蝦夷の抵抗(P41)</p> <p>朝廷は、東北地方に住み、朝廷の支配に従わない人々を蝦夷とよび、しばしば貢ぎ物をおさめるよう強制し、ときには武力で従わせようとしていました。</p> <p>これに対して、蝦夷の人々は激しく抵抗しました。胆沢地方(岩手県奥州市付近)を中心とした蝦夷の指導者のアテルイも、その一人です。789年、5万人の朝廷軍がアテルイの本拠地を攻撃しました。しかし結果は、アテルイのたくみな作戦の前に朝廷軍の惨敗に終わりました。</p> <p>797年、坂上田村麻呂が征夷大將軍に任命されると、801年、4万人の朝廷軍を率いて、やっと胆沢地方を平定し、翌年、大きな胆沢城をつくりました。アテルイは、軍を率いて降伏し、捕りよとして都に連れていかれました。田村麻呂は、朝廷にアテルイの命を助けるように強くたのみましたが、その願いは聞き入れられず、アテルイは河内国(大阪府)で処刑されました。</p>
D.現行	<p>平安京(P48)</p> <p>8世紀から9世紀にかけて、朝廷は、支配に従おうとしない東北地方の蝦夷に対してたびたび大軍を送り、特に征夷大將軍になった坂上田村麻呂の働きもあってその勢力を広げました。しかしその後も、蝦夷は律令国家の支配に強く抵抗し続けました。</p> <p>歴史にアクセス 蝦夷の抵抗(P49)</p> <p>朝廷は、東北地方に住み、朝廷の支配に従わない人々を蝦夷と呼び、たびたび貢ぎ物をおさめるよう強制し、ときには武力で従わせようとしていました。</p> <p>これに対して、蝦夷の人々は激しく抵抗しました。胆沢地方(岩手県奥州市付近)を中心とした蝦夷の指導者のアテルイも、その一人です。789年、5万人の朝廷軍がアテルイの本拠地を攻撃しました。しかし結果は、アテルイのたくみな作戦の前に朝廷軍の惨敗に終わりました。</p> <p>797年、坂上田村麻呂が征夷大將軍(蝦夷を征服するために設けられた軍の総司令官)に任命されると、801年、4万人の朝廷軍を率いて、ようやく胆沢地方を平定し、翌年、大きな胆沢城をつくりました。アテルイは、軍を率いて降伏し、捕虜として都に連れていかれました。田村麻呂は、朝廷にアテルイの命を助けるように強くたのみましたが、その願いは聞き入れられず、アテルイは河内国(大阪府)で処刑されました。</p>

(2)武士の成長について

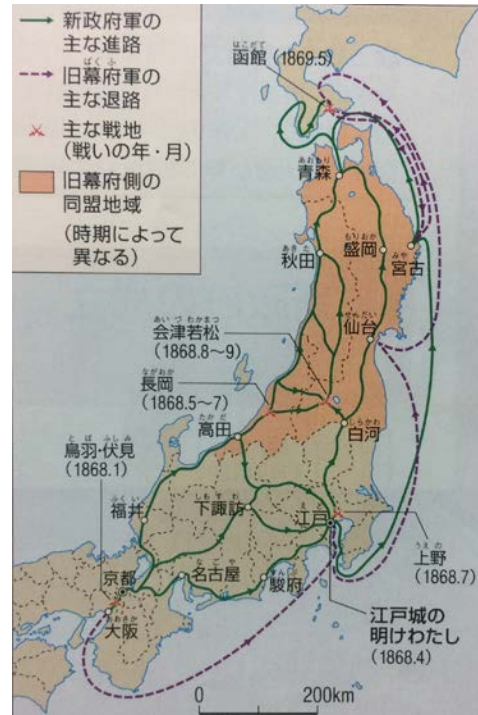
A.1981	武士の成長(P66)
--------	-------------------

	<p>11 世紀の後半には、東北地方にあいついで大きな戦乱がおこったが、源義家は、東国の武士を率いてこの戦乱をしずめ、その名を高めた。</p> <p>このころ、東北地方では、藤原氏を名のる豪族が勢力をひろげ、平泉(岩手県)を中心に栄えた。この奥州藤原氏が建てた中尊寺の金色堂は、浄土信仰がこの地方にひろまったことを示している。</p> <p>鎌倉幕府の成立(P72, 73)</p> <p>平氏をほろぼしたのち、義経は、頼朝と仲が悪くなり、奥州の藤原氏のもとにのがれた。そこで頼朝は、義経をとらえることを口実に、朝廷の許しを得て、国ごとに守護を、平氏に関係のあった荘園や公領に地頭を置いた。</p>
B.1993	<p>武士団の成長(P66, 67)</p> <p>11 世紀の後半になると、東北地方で二度にわたり大きな戦乱が起こった。源義家は、このときに東国の武士を率いて戦乱をしずめたので、その名を高め、広く東国の武士との間に主従関係を結んだ。このことから、源氏は東国で勢力をのばした。</p> <p>なお、源義家が都に引き上げたあとの東北地方には、豪族の藤原氏が広く勢力をのばして平泉(岩手県)を中心に栄えた。</p> <p>鎌倉幕府の始まり(P 79)</p> <p>さらに頼朝は、義経が奥州の藤原氏のもとにのがれると、藤原氏をも攻めてほろぼし、ついに全国の軍事支配権を手に入れた。</p>
C.2010	<p>武士の成長と院政(P50)</p> <p>11 世紀後半には、東北地方の大きな戦乱をしずめた、源氏の源義家が東国に、12 世紀前半には、平氏が西国に勢力をのばしました。</p> <p>鎌倉幕府の始まり(P52)</p> <p>さらに、義経が奥州の藤原氏のもとにのがれると、平泉を中心に栄えていた藤原氏をも攻めほろぼしました。</p> <p>挿絵 平泉中尊寺金色堂内部(P53)</p> <p>東北地方の豪族の藤原氏は、金や馬などの産物と、北方との交易によって栄え、浄土へのあこがれから金色堂をつくりました。頼朝は、自立する勢力をもっていた藤原氏をほろぼしてその富をにぎり、全国の軍事的支配を達成しました。</p>
D.現行	<p>武士団と荘園(P67)</p> <p>11 世紀後半には、東北地方の武士どうしの争いをきっかけにした大きな戦乱(前九年・後三年合戦)が起こりました。この争いをしずめた源氏の源義家が東日本に勢力を広げ、東北地方では平泉(岩手県)を拠点に成長した奥州藤原氏が力を持ちました。</p> <p>鎌倉幕府の始まり(P70)</p> <p>さらに、義経が平泉の奥州藤原氏のもとにのがれると、頼朝は、義経と藤原氏も攻めほろぼし、全国を支配下に置きました。</p> <p>挿絵 3. 中尊寺金色堂(P67)</p> <p>奥州藤原氏は、金や馬などの産物と北方との交易によって栄え、浄土へのあこがれから中尊寺に金色堂を建てました。</p>

(3)戊辰戦争について

A.1981	<p>戊辰戦争と新政府(P208)</p> <p>さらに新政府に反対する会津藩(福島県)をはじめ、東北地方の諸藩を攻め、最後に函館にたてこもった旧幕府軍を降伏させた。この戦争を戊辰戦争とよんでいる。</p>
B.1993	<p>大政奉還と王政復古(P207)</p> <p>さらに幕府への信義を守ろうとする会津藩(福島県)などを攻め、翌年には函館に立てこもった旧幕府軍を降伏させた。この戦争を戊辰戦争とよんでいる。</p>
C.2010	<p>大政奉還と王政復古(P137)</p> <p>新政府軍は、軍を集めて江戸城をあけわたさせ、翌年には旧幕府軍をすべて降参させました(戊辰戦争)。</p>
D.現行	<p>大政奉還と王政復古(P159)</p> <p>新政府は、江戸城を明けわたさせ、その後も軍を進めて、翌年には函館(北海道)で旧幕府軍を最終的に降伏させ、国内を平定しました。こうした旧幕府軍と新政府軍との戦いを戊辰戦争といいます。</p>

挿絵 6. 戊辰戦争



(4)昭和恐慌による東北大凶作について

A.1981	日本経済のいきづまり (P272) 1931 年(昭和 6 年)には、東北地方や北海道地方に、冷害による大凶作がおそった。
B.1993	日本経済の行きづまり (P269) そのうえ、1931 年(昭和 6 年)には、東北地方や北海道に、冷害による大凶作がおそった。
C.2010	世界恐慌と日本経済(P185) 特に東北と北海道は大凶作にみまわれました。
D.現行	昭和恐慌(P216) 大凶作に見まわれた東北地方と北海道では、ききんがおこりました。借金のための女性の「身売り」や、学校に弁当を持っていけない「欠食児童」が、社会的な問題になりました。

挿絵 7.東北地方の不況



教科書記述（高等学校）

(1)律令国家形成期の蝦夷支配について

a.1988	<p>平城京と国土の開発(P47)</p> <p>充実した国力を背景に、政府は領域の拡大にもつとめた。東北地方に住み、当時の朝廷から異民族とみなされていた蝦夷は、7世紀ころから政党の対象とされるようになり、大化の改新後まもなく、征討のための基地として、北陸に淳足・磐舟の2柵が設けられた。つづいて斉明天皇の時代には、阿倍比羅夫が秋田地方の蝦夷を服属させた。8世紀にはいると蝦夷の征討はいつそう進み、日本海側には出羽国がおかれ、ついで秋田城がきずかれ、太平洋側にも多賀城がきずかれた。</p> <p>「蝦夷と隼人」(P47)</p> <p>東北地方はもともと自然の富にめぐまれ、狩猟・漁撈・採取の活動が盛んで、縄文時代の終わりころには、とくにその北部を中心に亀ヶ岡文化がさかえた。その後、農耕文化が西日本を中心に発展し、近畿地方に基盤をもつ大和政権を中心に国家が形成されてくるにつれて、東北地方に住む人々は、朝廷から異種の文化をもつ異民族として扱われ、蝦夷とよばれるようになった。九州地方に住む隼人も、蝦夷と同様に異民族とみなされ、武力や芸能で朝廷に奉仕するようになった。</p> <p>中央集権国家が発展するのに応じて、朝廷は蝦夷を服属させようとはかり、ときには武力を用いてこれを征討した。8世紀にはいると、蝦夷の社会でも農耕が進み、有力な豪族がうまれてきた。8世紀の終わりにしきりにおこった蝦夷の反乱は、このような豪族にひきいれられた蝦夷が、朝廷による支配の強化に抵抗しておこしたものである。</p>
b.1998	<p>平城京と国土の開発(P49, 50)</p> <p>充実した国力を背景に、政府は領域の拡大にもつとめた。東北地方に住み、当時の朝廷から異民族とみなされていた蝦夷は、7世紀ころから征討の対象とされるようになり、大化の改新後、支配のための拠点として、北陸に淳足・磐舟の2柵が設けられた。つづいて斉明天皇の時代には、阿倍比羅夫が秋田地方の蝦夷を服属させた。さらに8世紀にはいると、蝦夷の支配はいつそう進み、日本海側には出羽国がおかれ、ついで秋田城がきずかれ、太平洋側にも多賀城がきずかれた。</p> <p>「蝦夷と隼人」(P49)</p> <p>東北地方はもともと自然の富にめぐまれ、狩猟・漁撈・採取の活動が盛んで、縄文時代の終わりころには、とくにその北部を中心に亀ヶ岡文化がさかえた。その後、弥生前期には、日本海を経由して青森県津軽地方にまで稲作が行われていた。しかし近畿地方に基盤をもつ大和政権を中心に国家が形成されてくるにつれて、東北地方に住む人々は、朝廷から異種の文化をもつ異民族として扱われ、蝦夷とよばれるようになった。九州南部に住む隼人も、蝦夷と同様に異民族とみなされ、武力や芸能で朝廷に奉仕するようになった。</p> <p>中央集権国家が発展するのに応じて、朝廷は蝦夷を服属させようとはかり、ときには武力を用いてこれを征討した。8世紀にはいると、蝦夷の社会でも有力な豪族がうまれてきた。8世紀の終わりにしきりにおこった蝦夷の反乱は、このような豪族にひきいれられた蝦夷が、朝廷による支配の強化に抵抗しておこしたものである。</p>
c.2007	<p>平城京と地方社会(P 40, 41)</p> <p>国家体制が実現し、充実した力を持った中央政府は、支配領域の拡大にもつとめた。政府が蝦夷とよんだ東北地方の在地の人びとに対しては、唐の高句麗攻撃により、対外的緊張が高まった7世紀半ばに、日本海側に淳足柵・磐舟柵を設けた。斉明天皇の時代には阿倍比羅夫が遣わされ、秋田地方などさらに北方の蝦夷と関係を結んだ。しかし、政府の支配領域はまだ日本海側沿いの拠点にとどまっていた。8世紀になると、軍事的な制圧政策が進められた。日本海側には出羽国がおかれ、ついで秋田城がきずかれ、太平洋側には陸奥国府となる多賀城がきずかれて、それぞれ出羽・陸奥の政治や蝦夷対策の拠点となった。</p> <p>平安京の確立と蝦夷の戦い(P 51, 52)</p> <p>東北地方では、奈良時代にも北上川や日本海沿いを北上して城柵が設けられていった。城柵は、政庁や実務をおこなう役所群・倉庫群が配置され、行政的な役所としての性格を持ち、そのまわりに関東地方などから農民(柵戸)を移住させて開拓が進められた。こうして城柵を拠点に、蝦夷地域への支配の浸透が進められた。しかし、光仁天皇の780(宝亀11)年には帰順した蝦夷の豪族伊治咩麻呂が乱をおこし、一時は多賀城をおとしいる大規模な反乱に発展した。この後、東北地方では三十数年にわたって戦争があいついだ。桓武天皇の789(延暦8)年には紀古佐美を征東大使として大軍を進め、北上川中流の胆沢地方</p>

	<p>の蝦夷を制圧しようとしたが、族長阿弭流為の活躍により政府軍が大敗する事件もおこった。その後、坂上田村麻呂が征夷大將軍となり、田村麻呂は 802(延暦 21)年に胆沢地方に胆沢城をきずき、阿弭流為を帰順させて鎮守府を多賀城からここに移した。翌年には北上川上流に紫波城を築造し、東北経営の前進拠点とした。日本海側でも、米代川流域まで律令国家の支配権がおよぶことになった。</p>
d.現行	<p>地方官衙と「辺境」(P 48, 49) 律令にもとづく国家体制が実現し、充実した力を持った中央政府は、支配領域の拡大にもつとめた。政府が蝦夷とよんだ東北地方の在地の人びとに対しては、唐の高句麗攻撃により対外的緊張が高まった 7 世紀半ばに、日本海側に淳足柵・磐舟柵を設けた。斉明天皇の時代には阿倍比羅夫が遣わされ、秋田地方などさらに北方の蝦夷と関係を結んだ。しかし、政府の支配領域はまだ日本海側沿いの拠点にとどまっていた。8 世紀になると、軍事的な制圧政策が進められた。日本海側には 712(和銅 5)年に出羽国がおかれ、ついで秋田城が築かれ、太平洋側にも 7 世紀後期の城柵に続けて陸奥国府となる多賀城がきずかれて、それぞれ出羽・陸奥の政治や蝦夷対策の拠点となった。</p> <p>平安遷都と蝦夷との戦い(P 60) 東北地方では、奈良時代にも陸奥側では多賀城を基点として北上川沿いに北上して城柵を設け、出羽側では秋田城を拠点に日本海沿いに勢力を北上させていった。城柵は、政庁を中心として外郭の中に実務をおこなう役所群・倉庫群が配置され、行政的な役所としての性格を持ち、そのまわりに関東地方などから農民(柵戸)を移住させて開拓が進められた。こうして城柵を拠点に、蝦夷地域への支配の浸透が進められた。しかし、光仁天皇の 780(宝亀 11)年には帰順した蝦夷の豪族伊治咎麻呂が乱をおこし、一時は多賀城をおとしいて焼くという大規模な反乱に発展した。こののち、東北地方では三十数年にわたって戦争があいついだ。桓武天皇の 789(延暦 8)年には紀古佐美を征東大使として大軍を進め、北上川中流の胆沢地方の蝦夷を制圧しようとしたが、蝦夷の族長阿弭流為の活躍により政府軍が大敗する事件もおこった。その後、征夷大將軍となった坂上田村麻呂は、802(延暦 21)年胆沢地方に胆沢城をきずき、阿弭流為を帰順させて鎮守府を多賀城からここに移した。翌年にはさらに北上川上流に志波城を築造し、東北経営の前進拠点とした。日本海側でも、米代川流域まで律令国家の支配権がおよぶことになった。</p>

(2)武士の成長について

a.1988	<p>武士の成長(P79, 80) このころ、陸奥では豪族安倍氏の勢力が強大で、国司と争っていた。源頼信の子頼義は陸奥守・鎮守府將軍として任地にくだり、子の源の頼義とともに東国の武士を率いて安倍氏と戦い、出羽の豪族清原氏のたすけをえてようやくこれをほろぼした(前九年の役)。その後、安倍氏にかかわって陸奥・出羽両国で大きな勢力をえるようになった清原氏一族に内紛がおこった。当時、陸奥守だった義家はこれを介入し、藤原清衡をたすけて内紛を平定した(後三年の役)。これらの戦いをつうじて源氏は東国武士団との主従関係を強め、武家の棟梁としての地位をかためた。 奥羽地方ではこれ以後、陸奥の平泉を根拠地とする藤原清衡の支配が、強大となり、子基衡・孫秀衡と 3 代 100 年にわたって奥州藤原氏が富強をほこることになった。</p> <p>鎌倉幕府(P92) そののち頼朝は、逃亡した義経をかくまったとして奥州藤原氏をほろぼし、1192(建久 3)年、法皇の死後には、ついに念願の征夷大將軍に任ぜられた。</p>
b.1998	<p>源氏の進出(P80) また、陸奥では豪族安倍氏の勢力が強大で、国司と争っていたが、源頼信の子頼義は陸奥守として任地にくだり、子の源の頼義とともに東国の武士を率いて安倍氏と戦い、出羽の豪族清原氏のたすけを得てほろぼした(前九年の役)。その後、陸奥・出羽両国で大きな勢力を得た清原氏一族に内紛がおこると、陸奥守だった義家はこれを介入し、藤原(清原)清衡をたすけて内紛を平定した(後三年の役)。これらの戦いをつうじて源氏は東国武士団との主従関係を強め、武家の棟梁としての地位をかためた。東国武士団のなかには義家に土地を寄進して保護を求めるものがふえたため、政府があわててこれを禁止したほどである。 また義家の去ったあとの奥羽地方では、陸奥の平泉を根拠地として藤原清衡の支配が強大となった。清衡・基衡・秀衡の 3 代 100 年にわたって奥州藤原氏は、金や馬などの産物の富によって京都の文化を移入したり、北方の地との交易を行って独自の文化を育て、繁栄をほこ</p>

	<p>った。</p> <p>鎌倉幕府(P91, 92) そののち頼朝は、逃亡した義経をかくまったとして奥州藤原氏をほろぼし、1190(建久元)年には上洛して右近衛大将となり、1192(建久)年、法皇の死後には、ついに念願の征夷大將軍に任ぜられた。</p>
c.2007	<p>源氏の進出(P75) また、陸奥では豪族安倍氏の勢力が強大で国司と争っていたが、源頼信の子頼義は陸奥守として任地に下り、子の源義家とともに東国の武士をひきいて安倍氏と戦い、出羽の豪族清原氏のたすけを得て安倍氏をほろぼした(前九年合戦)。その後、陸奥・出羽両国で大きな勢力を得た清原一族に内紛がおこると、陸奥守であった源義家が介入し、藤原(清原)清衡をたすけて内紛を平定した(後三年合戦)。こののち奥羽地方では清衡の子孫による支配が続いたが、一方でこれらの戦いを通じて源氏は東国武士団との主従関係を強め、武家の棟梁としての地位を固めていった。</p> <p>院政期の社会(P83) 地方では各地の武士が館をきずいて、一族や地域の結びつきを強めるようになり、なかでも奥羽地方では、陸奥の平泉を根拠地として藤原清衡の支配が強大となった。奥州藤原氏は、清衡・基衡・秀衡の3代100年にわたって、金や馬などの産物の富で京都文化を移入したり、北方の地との交易によって独自の文化を育て、繁栄を誇った。</p> <p>鎌倉幕府(P89,90) その後、頼朝は逃亡した義経をかくまったとして奥州藤原氏を滅ぼすと、1190(建久元)年には念願の上洛が実現して右近衛大将となり、1192(建久3)年、後白河法皇の死後には、征夷大將軍に任じられた。</p>
d.現行	<p>源氏の進出(P84) また、陸奥では豪族安倍氏の勢力が強大となり、国司と争っていたが、源頼信の子頼義は陸奥守として任地に下り、子の源義家とともに東国の武士をひきいて安倍氏と戦い、出羽の豪族清原氏の助けを得て安倍氏をほろぼした(前九年合戦)。その後、陸奥・出羽両国で大きな勢力を得た清原一族に内紛がおこると、陸奥守であった源義家が介入し、藤原(清原)清衡を助けて内紛を制圧した(後三年合戦)。こののち奥羽地方では陸奥の平泉を根拠地として清衡の子孫(奥羽藤原氏)による支配が続くが、一方でこれらの戦いを通じて源氏は東国武士団との主従関係を強め、武家の棟梁としての地位を固めていった。</p> <p>院政期の社会(P90) 地方では各地の武士が館を築き、一族や地域の結びつきを強めるようになった。なかでも奥羽地方では、藤原清衡が奥六郡(岩手県)の支配権を握ると、陸奥の平泉を根拠地として支配を奥羽全域に広げていった。奥州藤原氏は、清衡・基衡・秀衡の3代100年にわたって、金や馬などの産物の富で京都文化を移入したり、北方の地との交易によって独自の文化を育て、繁栄を誇った。</p> <p>鎌倉幕府(P97) その後、頼朝は逃亡した義経をかくまったとして奥州藤原氏を滅ぼすと、1190(建久元)年には念願の上洛が実現して右近衛大将となり、1192(建久3)年、後白河法皇の死後には、征夷大將軍に任ぜられた。</p>

(3)戊辰戦争について

a.1988	<p>戊辰戦争(P238) さらに奥羽越列藩同盟を結成した東北諸藩を鎮圧して、9月には反政府派の中心とみられた会津若松城を攻め落とした。</p>
b.1998	<p>戊辰戦争と新政府の発足(P237) さらに奥羽越列藩同盟を結成した東北諸藩を鎮圧して、9月には反政府派の中心とみられた会津若松城を攻め落とした。</p>
c.2007	<p>戊辰戦争と新政府の発足(P237) さらに東征軍は、奥羽越列藩同盟を結成した東北諸藩の抵抗を打ち破り、9月にはその中心とみられた会津若松城を攻め落とした。</p>
d.現行	<p>戊辰戦争と新政府の発足(P260)</p>

	さらに東征軍は、奥羽越列藩同盟を結成した東北諸藩の抵抗を打ち破り、9月にはその中心とみられた会津若松城を攻め落とした。
--	-------------------------------------------------------------

(4)昭和恐慌による東北大凶作について

a.1988	金解禁と世界恐慌(P309, 310) 不況のために兼業の機会の少なくなったうえ、都市の失業者が帰農したから、東北地方を中心に農家の困窮は著しく、欠食児童や婦女子の身売りが続出した。
b.1998	金解禁と世界恐慌(P312) 不況のために兼業の機会の少なくなったうえ、都市の失業者が帰農したため、東北地方を中心に農家の困窮は著しく、欠食児童や婦女子の身売りが続出した。
c.2007	金解禁と世界恐慌(P 320) 不況のために兼業の機会も少なくなったうえ、都市の失業者が帰農したため、東北地方を中心に農家の困窮は著しく(農業恐慌)、欠食児童や女子の身売りが続出した。
d.現行	金解禁と世界恐慌(P 344) 不況のために兼業の機会も少なくなったうえ、都市の失業者が帰農したため、東北地方を中心に農家の困窮は著しく(農業恐慌)、欠食児童や女子の身売りが続出した。

(5)縄文人の生活

b.1998	縄文人の生活と信仰(P14) それは広場をかこんで数軒の竪穴住居が環状にならぶものが多く、住居だけでなく、食料を保存するための貯蔵穴群や墓地、さらに集会所ないし共同作業場と考えられる大型の竪穴住居がともなう場合もある。これらのことから、縄文時代の社会を構成する基本的な単位は、4～6軒程度の世帯からなる20～30人ほどの集団であったらしい。
c.2007	縄文人の生活と信仰(P10) それは広場を囲んで数軒の竪穴住居が環状に並ぶものが多く、住居だけでなく、食料を保存するための貯蔵穴群や墓地、さらに青森県三内丸山遺跡のように集合住宅と考えられる大型の竪穴住居が伴う場合もある。これらのことから、縄文時代の社会を構成する基本的な単位は、4～6軒程度の世帯からなる20人～30人ほどの集団であったらしい。
d.現行	縄文人の生活と信仰(P14) それは、広場を囲んで数軒の竪穴住居が環状に並ぶものが多く、住居だけでなく、食料を保存するための貯蔵穴群や墓地、さらに青森県三内丸山遺跡のように集合住宅と考えられる大型の竪穴住居が伴う場合もある。これらのことから、縄文時代の社会を構成する基本的な単位は、4～6軒程度の世帯からなる20人～30人ほどの集団であったと考えられている。